

高麗時代の「叛逆伝」研究 III

——立伝人物の分析——

西 川 孝 雄

はじめに

1. 崔氏武人政権の性格
2. 『高麗史』列伝「叛逆」(三)
 - (i) 立伝人物史料
 - (ii) 「叛逆」(三)の人物分析

小 結 論

はじめに

先に、高麗時代の「叛逆伝」研究II——立伝人物の分析——（愛知学院大学『文学部紀要』第36号）を発表した。そこでは主に『高麗史』列伝の「叛逆」(二)に見える立伝人物8名を分析した。列伝第四十一の8名は第18代毅宗王代から第19代明宗王代そして第20代神宗王代までの叛逆者人物が集録されていた。今回は列伝第四十二「叛逆」(三)に集録されている第19代明宗王代から第23代高宗王代までの立伝人物4名について分析検討してその特色を解明したいと思う。この立伝人物4名は武臣で崔氏武人政権創立者の崔忠献（1149-1219）をはじめに瑠（怡）（?-1249年）、沆（?-1257年）、竝（?-1258年）の4代にわたって政権を握った人々である。

以下において「叛逆者」と云われた人々が生きた当時の社会の葛藤と矛盾構造を分析し、何故に武臣が「叛逆」に立ち上がったのか、各人物についてその特色を考察検討することにす。その前に、崔忠献が創立した崔氏武人政権の4代にわたる政権の性格について概観し、所謂「崔氏武人政権」の特色を考察することにす。

1. 崔氏武人政権の性格

王権支配下で武臣が政権を獲得することを可能にした要因はどこにあったのであろうか。旗田巍先生の「高麗武人の政権争奪の形態と私兵の形成」⁽¹⁾や「高麗の武人と地方勢力——李義旼と慶州——」の研究⁽²⁾によると武人政権の土台は次の二点にあったと考

えられる⁽³⁾。

第1には強力な私兵集団であった。初めは悪少、死士という腕力の強いものや寄食して来る門客が中心であったが、やがて宿舍、武器、食糧を用意して都房という強大な私兵を養成した。国軍も残っていたが、それよりも私兵はずっと強力であった。

第2には農荘（農庄）と呼ばれる私的所有地であった。武人権力者は全国各地に農荘を置き、その収穫物を自家に運びこみ、自身および私兵の経費にあてた。

高麗王朝は第1期として建国と支配体制の整備をし第2期として王朝の繁栄と門閥官僚の時代をむかえその下であえいでいた多くの人々が門客（当代の名儒も含む）、悪少、死士として崔氏の私兵集団となった。「都房」とは慶大弁伝に「大升懼、招致死士百数人、留養門下以備之、号都房」とあり、死士（決死隊）を門下に留養して私兵を養成していたのである。また、武人は農荘と呼ばれた私的所有地を持ち、その収穫物を私兵の経費にあてて王権をあやつるようになって武人政権を実現させたのであった。しかし、この武人政権にも私兵集団やそれをやしなう農荘経費の獲得のみでは解決できない問題があった。つぎのようにいわれる点が問題である⁽⁴⁾。

私兵と農荘の存在は武人の自立性を示すが、国王から高い官爵をもらうことにより王朝内の地位を強め、その地位を利用して私兵や農荘をふやした点、また権力獲得の方法がみな王城内のクーデタであった点で、基本的には王朝の権威に依存する官人の域を脱していなかった。

1960年代に金鍾国先生は「高麗武臣政権の特質に関する一考察——私兵軍団と経済的基盤を中心として——」において武臣政権の成立について次のように評価されている⁽⁵⁾。

「武臣が単なる王朝寄生官人の地位に甘んぜず、それより脱却して新しい権力機構を作り出し、所謂『政房政治』を現出したこと。」

「武臣が旧支配層とちがって、直接に自己の門客や奴隷を派遣して所有地を経営するようになったのも大きな特質の一つである。そこには、従来の貴族のように、王朝権力に寄生して、それによって自己の田租を確保する寄生官人の姿はない。」

武臣の「政房政治」（官吏の選抜・罷免を処理した機関）の出現と「大土地所有」経営の二点を評価されている。勿論、金鍾国先生は崔氏政権は「実質的には高麗の支配者の位置にありながら、意識としてはまだ王朝寄生官人の残滓をそのまま保持し、外敵の侵入などに際しても、私門の利害のみを考えて行動している点など」の王朝権力を否定しきれない面があったと結論で指摘されている。また、当時寺院経済を支配していた僧徒と武臣政権の対立抗争について「政治的には王室を中心とする支配層と、武臣を中心とする支配層の闘争であり、経済的には、旧支配体系に依存する寺院経済が、新興支配層である武臣政権によって圧迫を加えられた結果」生じたものであると分析されている⁽⁶⁾。ただ、対立抗争は「初代の崔忠献の時代にのみ顕著にみられ」と指摘されてい

る。

以上のように武人政権の性格について私兵集団の成立や農莊経営により、私兵をやしない権力獲得の要因をつくったが反面、国王から高い官爵をもらい王朝の権威に依存する官人の域を脱していなかった点も指摘されている。

崔氏武人政権は実質的には支配者の位置にありながら国王から官爵をもらい王朝の権威に依存する官人と同様であった。「政房政治」を現出したり、門客や奴隷を派遣して「所有地経営」を実施した点は新しい面として評価されよう。「所有地経営」の内容が門客や奴隷を使用して経営していた古い関係や「王朝を脅かす一揆・反乱に対して徹底的に弾圧した点等歴史を動かす勢力を弾圧して王朝守護者」となってしまった崔氏武人政権の性格と限界を指摘出来たと考える。

以下において第19代明宗王代から第23代高宗王代までの立伝人物4名について分析検討してその特色を解明したいと思う。この立伝人物4名は所謂武人政権の4代にわたって政権を握った人々である。

2. 『高麗史』列伝「叛逆」(三)

(i) 立伝人物史料

前述したように列伝第四十二「叛逆」(三)には立伝人物4名があげられている。この4名は4代にわたって政権を握った人々である。武人政権を創立して何故に「叛逆」に立ち上がったのか。各人物についてその特色を考察検討することにする。

(1) 崔忠献(1149-1219)(毅宗3-高宗6)

崔忠献さいちゆうけんは武臣で崔氏武人政権の創立者である。父は元浩で上將軍であった。黄海道牛峰郡の人で武臣の家に生まれ、明宗4(1174)年の趙位寵の乱を鎮圧して武名をあげた人物である。明宗26(96)年には当時政界を支配していた武人李義暉を暗殺し、政権を掌握するに到った。「叛逆伝」によってその顛末をみて寸評を加えることにする。その伝記は凡そ、次のようである⁽⁷⁾。

(史料1)

初名鸞。牛峯の人。父元浩(?~1176年)は上將軍たり。忠献は良醞令うん(宮中の酒に関する事を司る官衙、正八品)に蔭補せらる。高麗明宗四年、元帥奇卓誠、趙位寵を撃つや、忠献の勇敢なるを聞き選んで別抄都令に補す。勞を以て攝(職)將軍に累轉す。弟忠粹は東部録事と爲る。性猜險勇悍なり。二十六年李義暉の子將軍至榮、忠粹の家の鶺鴒ぼんこう(どぼと)を奪う。忠粹還さんことを請い、言甚だ悖る(さからう)。至榮怒りて家僮をして之を縛せしむ。忠粹の曰く、將軍の手縛ちとにあらざれば誰か敢て我を縛せんと。至榮壯として之を釋す。忠粹即ち忠献に告げて曰く、義暉父子四人實に國賊たり、我之を斬らんと欲す、如何んと。忠献之を難しとす。忠粹の曰く、吾志已に決す。中止すべからずと。忠献乃ち之を然りとす。會ま

王普濟寺に幸す。義旼疾と稱して駕に扈さず潛に彌陀山の別墅に往く。忠獻忠粹及び其の甥隊正朴晉材，族人盧碩崇等と與に刃を袖にして別墅の門外に至りて之を候う。義旼將に還らんとし，門を出て馬に跨^{またが}らんと欲す。忠粹突入して之を撃つ。中らず。忠獻直に前んで之を斬る。從者數十人股弁（足がふるえおののく）して皆潰^つゆ。碩崇をして首を持ちて馳せて京師に入り市に梟せしむ。觀る者驚噪し，聲都下に振う。扈從する者變を聞きて潛に遁れ，王も亦駕を趣して宮に還る。忠獻・忠粹馬を馳せ刃を露わして十字街に至り，監行の領將軍白存儒を見て告ぐるに故を以てす。存儒樂んで之に従い，將士を召集す。忠獻・忠粹兵を率いて宮門に詣り，奏して曰く，賊臣義旼曾て弑逆の罪を負い，生民を虐害し，窺に大寶を覘う。臣等疾視すること久し。今國家の爲に之を討つ。但だ事の泄れんことを恐れ，敢て命を請わざりき，死罪死罪と。王之を慰諭す。仍て大將軍李景儒・崔文清等と與に餘黨を討たんことを請い，遂に之と與に市街に坐して召募す。壯士響應す。是に於て諸將卒も亦皆畢く集り膝行して命を聽き，敢て仰ぎ見るものなし。乃ち城門を閉し支黨を分捕して悉く之を獲たり。忠獻，忠粹・文清・景儒と仁恩館に會して事を議す。人有り告げて云う。平章事權節平，孫碩，上將軍吉仁等兵を擧げんと謀ると。又景儒等の異謀有るを告ぐ。忠獻即ち節平の子將軍準，碩の子將軍洪胤を召し，之と飲みて言笑自若たり。俄にして左右を目して皆拉えて之を殺さしめ，又景儒を坐に斬る。文清は老て且つ直なるを以て釋して殺さず。忠獻等方幕に坐し，節平，碩及び將軍權允卿・柳森相，御史中丞崔赫尹等を分捕して之を殺す。又吉仁は壽昌宮に在りて變を聞き，即ち將軍兪光，朴公襲等と擅に武庫の兵仗を出して以て禁軍及び宦官奴隸凡そ千餘人に授け諭して曰く，今忠獻亂を爲し，多く無辜を殺し禍將に汝に及ばんとす，宜しく各戮力以て大功を立つべしと。乃ち衆を率いて宮門を出て市街に向う。忠獻等兵を勅して迎え戦い，敢死の者十餘人を以て先鋒と爲す。劔を揮って大呼し，陣を突て前む。吉仁の衆風を望んで四潰し，仁，兪光，朴公襲馳せて壽昌宮に入り，門を閉じて拒ぎ守る。忠獻等兵を率いて之を圍む。白存儒火を以て之を攻めんと欲す。仁懼れ垣を踰えて遁る。王人をして門を開かしめ，忠獻，忠粹を召す。忠獻等仁の猶お内に在らんを疑い，郎將崔允匡をして入りて奏せしめて曰く，賊臣義旼跋扈す，臣兵を擧げて之を誅せり。其の黨臣を忌み反て害を加えんと欲す，然れども上天之を助けず，兇徒自ら潰ゆ。尙，餘黨の潛んで内に在る有り。請う宮に入り搜捕せしめられんことをと。王之を許す。遂に允匡をして兵を縱^{はな}って闖入し，遇うに隨いて即ち殺す。僵屍狼籍たり。兪光，公襲と與に自刎し，王の左右皆散じ走り，唯だ小君及び宮姬數人側に侍して泣を垂るのみ。忠獻等兵を引て仁恩館に還り，參知政事李仁成，上將軍康濟文等三十六人を捕えて館に囚す。仁遁れて北山に至りて剃髮し，縑衣を被り巖より隨ちて死す。忠獻又上將軍周光美・大將軍金愈信等を殺す。僧有り告げて云う，吉仁王輪寺の僧徒を率いて事を擧げんと

欲す、請う之に備えよと。忠獻大に怒り、遂に囚する所の仁成等三十六人を殺し、人を遣り王輪寺に至りて之を覘わしむ。僧皆食に方りて堂に在り、怙然として變無し。忠獻其の誣なるを知り、告ぐる者を斬らんと欲すれば已に遁る。忠獻多く朝臣を殺し、人心洶々たり。乃ち使を諸道に遣りて之を慰安し、又封事十條を上りて時弊を曰い、嘉納せらる。忠獻又奏して内侍五十餘人を黜け、又王子僧小君（賤妾の子として生まれ僧侶になった王子）洪機・洪樞等の内に在りて政に干與するを以て、奏して其の本寺に還し、又嬖僧雲美・存道等王宮に出入し、朝臣多く之に附するを以て、並に之を黜く。是の年左承宣を拜し、尋で御史臺事を知る。翌年忠粹と與に功臣の號を賜わり、閣上に圖形せらる。忠獻・忠粹王を廢さんと欲し、醮（祭）を設けて天に告ぐ。是夕大に雷電し、雹を雨し、暴風木を抜く。後ち七日又大に雷電す。忠粹、晉材と往て忠獻に謀りて曰く、今上在位二十八年、老て政に倦み、諸小君常に上側に在りて竊に恩威を弄し、以て國政を亂ると。遂に議して王の母弟平涼公暎を立てんとす。兵を市街に勒して中軍と爲し、諸衛の兵を分ちて左右前後軍と爲して四街に屯せしめ、將卒を遣りて城門を閉し、杜景升を召して紫燕島に流し、又樞密院副使柳得義・將軍高安祐・大將軍白富公等十二人及び大禪師淵湛等十餘僧を嶺南に流し、洪機等小君十餘人を海島に配し、王を昌樂宮に幽し、太子濤を江華に放ち、平涼公暎を迎えて位に大觀殿に即かしむ。是を神宗と爲す。子淵を以て太子と爲す。忠獻・忠粹兵を擁して樞密院に入り、諸衛の將軍をして毬庭に屯せしむ。忠獻奏して内侍閔湜等七十餘人を黜く。王忠獻を以て靖國功臣三韓大臣大中大夫上將軍柱國と爲し、忠粹を輸誠濟亂功臣三韓正匡中大夫鷹揚軍大將軍衛尉卿知都省事柱國と爲し、晉材を刑部侍郎と爲す。忠粹其の女を以て太子に配せんとし、固く王に請う。王迫られて止むを得ず、其の先妃を外に出す。忠粹即ち大に工を聚めて裝具を備う。忠獻之を聞き其の家に到りて其の非を警す。忠粹初め其の言に従いしが、既にして翻然改圖して曰く、大丈夫の事を行うは當に自ら斷ずべきのみと。復た工を督すること舊の如し。其の母之に謂て曰く、汝兄の言に従う、予實に之を喜ぶ、今又何ぞ此の如きやと。忠粹怒りて曰く婦人の知る所にあらずと。手を以て之を推し、地に仆る。忠獻之を聞て曰く、罪は不孝より大るはなし。今母を辱しむること此くの如し。況んや我においてや、既に言語を以て之を諭すべからず、明朝當に吾衆をして廣化門に候い、其の女を拒んで納れざらしめんと。人之を忠粹に告ぐ。忠粹其の徒に謂て曰く、人吾が行止において敢て誰何する者なし、但だ兄の我を制するは其の衆有るを恃めばなり。詰且吾れ當に其の徒を掃除せん、爾等努力せよと。人又之を忠獻に告ぐ、忠獻泣て其の衆に謂て曰く、忠粹女を以て東宮に配せんと欲する者は他無し、以て不軌を圖らんとするなり。明朝吾が徒を掃除せんと欲すと、事已に急なり、計將に安くにか出でんと。衆の曰く、請う朴晉材と謀れと。忠獻即ち晉材及び族人金躍珍・碩崇を召して之を告ぐ。晉材曰く、兄弟均

しく吾が舅なり、何の厚薄か有らん。然れども國家の安危は此の一擧に係る。其の弟を助けて逆を爲さんよりは、孰ぞ兄を右けて順に従うに若かんや、且つ大義親を滅すと。我當に躍珍・碩崇等と與に衆を率いて之を助けんと。忠獻大に悦ぶ。夜三鼓、忠獻兵千餘を率いて高達坂より廣化門に至り、門者に告げて曰く、忠粹明朝亂を作さんと欲す。吾將に社稷を衛らんとす、速に此を以て王所に達せよと。門者以て聞ず。王大に驚き、即ち命じて門を開て之を納れ毬庭に屯せしむ。又武庫の兵伏を發して禁軍に授け以て備う。諸衛の將軍も亦兵を率いて争い赴く。忠粹之を聞て懼れ、母を奉じ兄に投じて罪を請わんと欲せしが、麾下の將軍吳淑庇等一戰して雌雄を決せんことを請う。忠粹之を許し、黎明兵千餘人を率いて十字街に屯す。既にして其の軍卒等諸將の皆忠獻に歸するを聞き、自ら援無きを知り次第に遁れ去る。忠獻廣化門を出て市街に向いて下る。忠粹廣化門に向って上り、興國寺の南において戰を交う。忠粹の軍克たず、遂に大に潰ゆ。忠粹即ち淑庇等と馳せて保定門に至り、關を斬りて出で長湍を渡りて坡平縣金剛寺に至る。追者之に及び、首を斬りて京に傳う。王功を論じ、忠獻を知奏事知御史臺事に陞す。元年私僮萬積等公私の奴隸を集め將に亂を作さんとす。忠獻遂に萬積等百餘人を捕えて之を江に投ず。明年兵部尚書知吏部事と爲り、朝に兵部に往き、晝は吏部に入り、文武官を注擬す。又禁闕に出入するに兵を以て自ら衛る。開府儀同三司を加えられ、明年又三重大匡守大尉上柱國を加えらる。忠獻自ら縱恣なるを知り、變の不測に生ぜんことを恐れ、凡そ文武官閑良軍卒の勇悍なる者は皆招致し分ちて六番と爲し、更日に其家に直宿せしめ、都房と號し、其の出入、合番擁衛し、戰陣に赴くが如し。四年樞密使兵部尚書御史大夫を拜す。五年忠獻始めて私第に在りて内侍吏部員外郎盧瑄と文武官を注擬し以て奏す。王之を領し、二部の判事は政堂に坐して但だ檢閲するのみ。忠獻獨り政柄を專にし、或は左右の托する所に因り、賄賂を納れて其の意に稱う者は皆官に拜するを得。六年中書侍郎平章事吏部尚書太子少師に進む。熙宗立ち、壁上三韓三重大匡開府儀同三司守太師門下侍郎同中書門下平章事上將軍上柱國判兵部御史臺事太子太師に進む。王忠獻が擁立の功有るを以て、特に待するに殊禮を以てし、常に呼んで恩門相國と爲す。元年内莊の田一百結を賜い、又特進訐謀逸德安社濟世功臣門下侍中晉康郡開國侯を授く。二年詔して册して晉康侯と爲し府を立て、興寧と曰い、僚屬を置かしむ。忠獻命を男山の第に迎う。諸王皆其の門に詣る。禮畢り、册使を宴し、犀帶白金綾絹鞍馬を贈る甚だ厚し。其の餘讀册以下の諸執事にも亦白金綾絹を贈ること各差有り。夜更めて諸王を宴し、因りて奏して使副を留む。其の帳具花果絲竹聲伎の盛なる、人臣の家前古未だ有らざる所なり。自後忠獻宮禁に出入するに、便服して蓋を張り、侍從の門客殆んど三千人に滿つ。王忠獻に中書令晉康公を加う。忠獻辭して拜さず。明年復た中書令晉康公と爲す。忠獻の曰く、公は五等の首、中書令は人臣の極なりと。遂に辭して拜せず。是より先き人有り匿

名の書を怙して朴晉材が舅忠獻を去らんことを謀るを云う。是より兩家隙有り。晉材既に大將軍に至り、其門客忠獻に幾く、而して皆勇悍なり。晉材常に其の門客の官に除せらるる者少きを恨み、常に快々として不平なり。酒酣なれば輒ち忠獻の無狀を言う。且自ら謂えらく、若し忠獻無ければ國柄を專にするを得べしと。密に之を圖らんと欲し、忠獻に無君の心有りと流言す。忠獻其の遂に必ず己を害せんを知り、晉材を召し左右に命じて之を縛せしめ、其脚筋を斷じて白翎島に流す。居ること數日にして死す。又門客の勇悍なる者を遠島に配す。忠獻嘗て于濶洞に第を營み、人家百餘を毀ち、宏麗と爲すに務め、延袤數里、禁掖に擬し、北市塵に臨み別堂を構え、十字閣と號す。土木の役劇に、國內嗷々たり。忠獻權は人主を傾け威は中外に振い、人の忤う有れば即ち誅戮す。故に皆口を鉗して言う者なし。一日忠獻事を以て壽昌宮に詣りて王に謁す頃有りて王入内す。中官忠獻の從者を給て曰く、旨有り酒食を賜うと。乃ち引て深く廊廡の間に入る。俄に僧俗十餘人有り兵を持して突至し、從者數人を撃つ。忠獻變有るを知り、倉皇として奏して曰く、願くは上、臣を救えと。王默然戸を閉じて納れず。忠獻計の爲すべきなく、知奏事の房紙障の間に匿る。一僧有り、三たび索りしが竟に獲ず。時に金躍珍及び子怡の舅知奏鄭叔瞻重房に在りて事の急なるを聞き、即ち入りて忠獻を扶けて出ず。忠獻の黨指諭申宣甫・奇允偉等僧徒と格闘す。忠獻の都房六番皆宮城外に集りしが未だ忠獻の生死を知らず。茶捧盧永儀なる者有り、初め忠獻に従いて入内す。屋に登り大呼して曰く、吾公恙無しと。是において都房争い入りて之を救い、僧徒敗走す。躍珍忠獻に謂て曰く、我將に兵を率いて宮に入り、盡く宮中の人を殺し且つ大事を行わんと。忠獻之を止めて往くなからしめ、上將軍鄭邦輔等をして司鑰鄭允時及び中官を仁恩館に囚えて之を鞫せしむ。乃ち内侍郎中王濬明謀主となり、參政于承慶・樞密史弘績・將軍王珣等皆之に與る。忠獻王を怨み、之を廢して江華に遷し、太子社を仁州に放ち、漢南公貞を奉じて位に即かしむ。是を康宗と爲す。濬明及び承慶・弘績・珣等を外に流す。王忠獻の興寧府を改めて晉康府と爲し、文經武緯嚮理措安功臣の號を賜う。高宗三年契丹入寇す。參知政事鄭叔瞻を元帥と爲し、樞密副使趙仲を副とし、大に兵を發して之を禦がしむ。京都の人を括し文武を問わず、職の有無を論ぜず、凡そ從軍し得べき者は悉く軍に充つ。又僧を抄して軍と爲す。忠獻變の不測に生ぜんことを恐れ、其の家兵を閲して自ら衛る。叔瞻等進んで興義驛に至り、平州の兵を望見し、敵兵到ると爲し、軍潰亂し、退て國清寺に屯す。四年正月僧兵の從軍する者、忠獻を殺さんと謀り、佯りて敗軍の狀を爲し、宣義門に至り急に呼んで曰く、丹兵至れりと。門者拒んで納れず。僧徒斬關して入り、忠獻の家を攻めんとし市街に至る。巡檢軍の逐う所と爲り、奔りて新倉館に至り與に戦う。忠獻家兵を遣りて之を挾撃す。僧魁矢に中りて仆れ、僧徒散走す。忠獻の軍追て三百人を斬り城門を閉じて大に僧人を索め皆之を殺す。前後幾んど八百人。積屍山の如

く、血流れて川を成す。僧徒の亂を作すや、忠獻其の黨を鞠う。辭元帥叔瞻に連る。即ち之を召還して河東に流し、知門下省事鄭邦輔を以て之に代う。六年趙冲等契丹を破りて凱還す。忠獻其の功を忌み、迎迓の禮を停む。論功行賞忠獻之を主り功有る者に賞無く、人之を怨む者多し。忠獻疾有り上表して職を辭す。時に月熒惑を犯す。太史奏す、貴人死せんと。忠獻之を惡み、樂工を招集し、終日樂を奏せしむ。樂未だ闕らずして死す。年七十一。景成と諡す。百官縞素して會葬す。祕器羽葆鼓吹旗常王者に擬す。子怡之を嗣ぎ、子孫相承けて國秉を執るもの六十餘年に及ぶ。

武臣で崔氏武人政権の創立者の崔忠獻について、①叛逆時の王名と年代は明宗26年(1196)である。②出自と官職は父は元浩で上將軍である。牛峰人で良醞令(宮中の酒に関する事を司る官銜。良醞署の正八品)に父の功勳によって官に補任されている。別抄都令(都承旨)となり攝職の(異なる官位を代理し、臨時に引き受ける官職。正四品武官職)將軍に累転している。③王朝の待遇は晋康侯に封ぜられ晩年には王姓を賜っている。④動機は「明宗26年李義旼の子將軍至栄、忠粹の家の鶉鴿(どぼと)を奪ったことに端を発している。⑤参加者ははじめは家僮数名であったが多くの人々が参加するようになっていった。⑥解明端緒と結末は李義旼の暗殺で結末をむかえた。

武人崔忠獻について寸評すれば崔氏武人政権の創立者であった点に大きな意義がある。忠獻は「權は人主を傾け威は中外に振い、人の忤^{さから}う有れば即ち誅戮す。故に皆口を鉗して言う者なし」といわれ、「權傾人主」として君臨し、恐怖政治を実施した人物といえよう。

(2) 崔瑀(怡)(?-1249)(高宗36)

崔瑀(怡)は、高宗代の権臣である。初名は怡。晋康公忠獻の子である。樞密院副使に累遷している。崔氏武人政権を継承した。瑀の代から政房という政庁を私邸におき人事を処理した。「叛逆伝」によってその顛末をみて寸評を加えることにする。その伝記は大略、次のようである⁽⁸⁾。

(史料2)

初名は怡。高麗の晋康公忠獻の子なり。樞密院副使に累遷す。高宗六年(1219)忠獻疾有り密に謂て曰く、病將に瘳えざらんとす。恐らくは蕭墻の患(身内などのうちわもめ、内乱など)有らん、汝復た來る勿れと。怡遂に疾と稱して出でず。其の女婿將軍金若先をして疾に侍せしむ。大將軍崔俊文・上將軍池允深・將軍柳松節・郎將金德明、忠獻の羽翼たり。四人謀りて曰く、公世を棄てば吾輩必ず怡の粉蠶(身を粉にして努力する)する所と爲らん。季子珣は膽氣人に過ぐ、大事を屬すべしと。因りて怡の疾に侍するを候いて、之を除かんと欲し人を遣り怡に報じて曰く、令公病篤し公を見んと欲すと。報再三に至る。怡愈疑いて至らず。德明反て其の謀を以て怡に告ぐ。怡慰めて之を留む。俄にして俊文・允深等怡に至りて曰

く、令公疾革まる、宜しく速に往て候うべしと。怡即ち二人并に松節を捕え、遠島に分配し、道に俊文を殺す。忠獻死するに及び、怡其の畜う所の金銀珍玩を以て王に獻ず。明年又忠獻奪う所の公私田民を各其主に還し、又多く寒士（身分の低い人）を抜て人望を收む。八年晉陽侯に封ぜらる。怡固く辭す。尋で參知政事吏兵部尚書判御史臺事と爲る。東北面兵馬使報ず。蒙古の使^{シヤカ}這可等都護府城外に至ると。怡の曰く、前來の使も尚お未だ應ぜず、況んや後者をや。宜しく兵馬使をして慰諭して遣り還さしめよと。時人以爲らく、蒙古の^{キン}襲（仲たがい）は實に怡より始まると。怡宰樞を其の第に會して議し、南道州郡の精勇保勝軍を發し、宜州和州鐵關等要害の處に城き以て蒙古に備う。知奏事金仲龜曰く、比年州郡契丹兵の侵掠を蒙り民皆流亡す。今警の急なる（非常の急変）なくして^{にわか}遽に又徵發し、以て其力を勞せば、則ち邦本（國家の根本）固からず。將に之を若何せんと。怡竟に聽かず。十年怡陞羅城を修し、家兵を出して役徒と爲し、銀瓶三百米二千石を出して以て其の費を支う。十二年百官怡の第に詣りて政簿を上る。怡廳事（私宅の庭）に坐して之を受く。六品以下の官は堂下に再拜し、地に伏して敢て仰ぎ視ず。怡此より政房を私第に置き、文士を選びて之に屬す。號して必闡赤（モンゴル語、文士 ^{ビテシ} biteshi の意の音借語）と曰う。百官の銓注に擬し、批目（官史の任命・昇進・辭任等に関する発令を記したもの）を書して以て進む。王は但だ之を下すのみ。十三年怡^{しやう}腫（脚氣）を患う。兩府より掾吏に至るまで争いて祈禱し、齋を設け疏を作る。都下之が爲に紙貴し、諸醫理むる能わず。閤門祇候林靖の妻は本と醫家の女なり。毒膏を貼りて效有り。王特に靖を工部郎中に除し、以て怡の意を慰む。十四年怡教定都監をして禁内六官に牒し、各登科して未だ官せず才行有る者を擧げしむ。初め忠獻教定都監を置き庶事を掌らしむ。怡之に因る。怡の門客は多く當代の名儒なり。分ちて三番と爲し遞して書房に宿せしむ。十六年怡鄰舍百餘區を占奪し、毬場を築く。東西數百步、平坦碁局の如し。毬を撃つ毎に必ず里人をして水を灌ぎ塵を^{うるお}浼さしむ。又人家を壊ちて之を廣め、前後占奪する所無慮數百家、日に都房の馬別抄を集めて毬を撃たしめ、或は槊を弄し騎射せしめ怡宰樞耆老を邀え宴し、庭に臨んで之を觀、或は五六日に至る。能者には立ろに爵賞を加う。又五軍を分ちて戰を習わしめ、人馬顛仆死傷する者多し。其の終において田獵を習わしめ、縣絡循環たり。怡之を悦び、饗するに酒食を以てす。十八年怡の妻鄭氏死す。王官に命じて葬事を^ひ庀けしめ（治めさせ）、順徳王後の例を用い、賻るに大府の綵段七十匹を以てす。是年蒙古大學して侵入す。王三軍を遣りて之を禦がしむ。怡都を江華に遷さんと欲し、宰樞を其第に會して之を議す。皆畏縮して敢て言わず。夜別抄指揮金世冲門を排して入り、詰りて曰く、松京は太祖より以來歷代持守するもの凡そ二百餘年、城堅にして兵食足る。固と當に力を^{りく}戮して（あわせて）社稷を死守すべし。此を捨て將た安くにか都せんやと。怡守城の策を問う。世冲對うる能わず。怡遂に王

に殿を下りて江華に幸せんことを請う。王猶豫未だ決せず。怡祿轉車（官員の俸禄を運ぶ車）百餘兩を奪い、家財を江華に輸し、有司をして日を刻して五部の人口を發遣せしむ。勝して曰く、期に及びて途に登らざる者は軍法を以て論ぜんと又使を諸道に遣り、民を山城海島に移さしむ。二領軍を發して宮闕を江華に營み、遂に遷都す。二十一年王、怡が遷都の功を論じ、侯に封じ府を立てんと欲す。百官皆第に賀す。遂に晉陽侯に封ず。二十二年怡宰樞と議し、州郡の一品軍を徵して江華沿江の堤岸を加築す。二十九年食邑を加え爵を進めて公に封ぜらる。怡國學を修し、米三百斛を養賢庫に納め又大司成宋國贍・諫議洪鈞を遣り安南の地を相し、渠を鑿ちて海に通ぜんと欲し、可ならずして止む。東海の中島有り蔚陵（島）と名く。地膏沃にして珍木海錯多し。水程遠きを以て往來を絶つもの久し。怡人を遣りて之を視せしむ。屋基破礎宛然たる有り。是において東郡の民を移して之を實たす。後ち風濤險惡、人溺死多きを以て其の居民を罷む。三十三年怡王を享す。六案を設け七寶器を陳し、膳饌豊侈を極む。怡燕樂を好み聚飲度無し。或は三品以上を其の第に宴し、或は宰樞及び文武四品以上を宴し、歌吹連日、或は夜分に至りて罷む。三十六年死す。輟朝三日、匡烈と諡す。葬に及んで儀衛甚だ盛なり。後ち康宗の廟庭に配享す。怡適子無し。嬖妓瑞蓮房二男を生む。萬宗・萬全と曰う。初め怡兵柄を若先に傳えんと欲し二男の亂を爲さん恐れ、皆松廣社（全羅南道昇州郡にある寺）に送りて剃髮せしむ。後萬全をして歸俗せしめ、名を沆と改む。

崔瑀は崔氏武人政権の継承者である。寸評は瑀の代から政房という政庁を崔氏の私邸におき人事を処理した点が新しい点である。「專權擅命」者の瑀（怡）は武人出身の爲「當代の名儒」を門客として招聘し、「書房に宿せしめ」て施政の助言者として文人達を取りこんでいった人物といえよう。蒙古の侵入により都を江華に遷した。

(3) 崔沆 (?-1257) (高宗44)

崔沆さいこうは高宗代の権臣である。初名は萬全、晉陽公怡の子である。中書令になっている。崔氏武人政権を継承している。「叛逆伝」によってその顛末をみて寸評を加えることにする。その伝記は凡そ、次のようである⁽⁹⁾。

(史料3)

初名萬全、晉陽公怡の子。初め松廣社に送られて僧と爲り雙峰寺に住す。後ち歸俗して名を沆と改む。左右衛上護軍戸部尙書を拜す。諸王宰樞皆門に詣りて賀す。怡待制任翊をして書を授け、侍郎權躋ごんいをして禮を習わしむ。樞密院知奏事に遷る。怡家兵五百餘人を分與す。怡病むに及んで沆兵を領して府に入り病殆きを聞き、即ち其の家に遷る。怡死し、知吏部事上將軍周肅夜別抄及び内外都房を領し政を王に復さんと欲し、猶豫未だ決せず。殿前李公柱・崔良伯・金俊等七十餘人沆に歸す。肅も亦之に歸し、合番して擁衛す。沆喪に服すること二日にして除す。王、沆を銀青光祿大夫樞密院副使兵部尙書御史大夫太子賓客に拜し、尋で東西北面兵馬使

を兼ねしめ、又以て教定別監と爲す。沆知樞密閔曦・樞密副使金慶孫が衆心を得たるを忌み、海島に流し、又左承宣崔峒・將軍金安・指諭鄭洪裕及び怡の侍妾三十人を流す。沆又教定別監を以て清州の雪繻、安東の璽絲、京山の黃麻布、海陽の白紵布の諸別貢、及び金洪州等處の魚梁船税を蠲ぎ、又諸道の教定收獲員を徴し還し、其の任を按密使に委し以て人望を収む。王制を下して怡の食邑晉州の祿轉稅徭貢を直に沆の家に納れしむ。沆辭して受けず。沆前に大卿崔崐の女を娶る。女疾有るを以て之を棄て、改めて左承宣趙季珣の女を娶る。王牽龍中禁都知巡檢白甲内侍茶房衛に命じて御座肩輿燈燭を送り賜い、又黃金鏡奩（箱）粧具を賜う。諸王宰樞皆金帛を贈りて賀を致す。王命じて忠獻の眞（影）を昌福寺に、怡の眞を禪源社に移さしむ。參上參外別監及び武官各二十員導從し、太祖の眞を移す儀の如し。王中城を築くの功を以て門下侍中晉陽侯に拜し府を開かしむ。沆讓りて受けず。沆譖を信ず。凡そ私憾（怨）ある者は輒ち亂を謀ると誣告し、以て賞を邀める。鞫める（罪を取り調べる）に及んで驗無し。周肅は初名永賚と言う。性浮夸（ほら吹き）怡の友婿たり。怡寄するに腹心を以てす讒訴（人のことを悪くいってうったえる）を聞く毎に、必ず肅に委して之を治せしむ。肅其の意に阿り、曲直を問う無く皆之を殺す。肅又校尉を監選するに賂の多少を視て次序（順序）を爲す。朝野之を怨む。怡死し、沆肅が己に附せしを以て待つこと甚だ厚し。事皆咨問す。見子山の第に徙るや、肅をして知らしめず。是より始めて相疑忌（疑いねたむ）す。沆郎將林庚を遣り肅を押し海島に流し、熊川に至り沈めて之を殺す。肅意えらく將軍金孝精の構うる所と死に臨んで庚に語りて曰く、孝精吾と與に政を王に復さんと欲すと。庚還りて以て沆に告ぐ。沆孝精を島に流し、尋で之を殺す。又肅の女婿將軍崔宗弼・羅州副使李昶を流す。是の年王命じて侯に封じ府を立てしむ。沆讓りて受けず。三十九年李峴使を奉じて蒙古に如く。沆、峴に謂て曰く、彼若し出陸を問わば、宜しく答うるに今年六月乃ち出ざるを以てすべしと。峴至るに及んで帝出陸する否やを問う。峴對うるに沆の言の如し。帝又問う。爾等を留め、別に使を遣りて審示せしめん若し否らざれば如何んと。對て曰く臣正月道に就く、己に昇天府白馬山において宮室城廓を營む、臣敢て妄に對えんやと。帝乃ち峴を留め、多可（・阿）土等を遣り密に勅して曰く、汝彼國に到り王陸に迎うれば則ち百姓未だ出でずと雖も猶お可なり。然らざれば速に回れ。汝の來るを待て當に兵を發し討を致すべしと。峴の書狀張鎰なる者多可に隨いて來り、密に之を知り、具に王に白す。王以て沆に問う。沆對て曰く、大駕は宜しく輕ろしく江外に出ずべからずと。公卿等皆沆の意を希い執りて不可とす。王之に従い、新安公侄を遣り江を出て多可等を迎えしめ請いて梯浦の館に入る。王乃ち出て見る。宴未だ罷まざるに多可等王の帝命に従わざるを怒り昇天館に還る。識者曰う、沆淺智を以て國の大事を誤る、蒙古必ず至らんと。未だ幾ならず、果して至り州郡屠滅し、過ぐる所皆煨燼（焼け残り）と爲る。

四十年門下侍中判吏部御史臺事に拜す。沆家に在りて遙に謝す。遷都より以來蒙古出陸を督し、兵を縦ほしいままにして侵掠す。永寧公綽・李峴おく共に書を貽りて太子をして出陸し蒙古軍を迎え以て帝怒を解くべきを言う。宰樞會議せしが沆復た蒙古が太子を執え城下に迫らば、何を以て處せんと言ひ、出迎の議つひ竟に寝む。四十二年王詔を下して大藏經板雕造の告成、江都築城、大廟草創等の功を褒賞す。沆辭して受けず。尋で中書令監修國史に進む。四十四年沆病篤し王爲に獄囚を放つ。沆病を扶けて後園の小亭に登り、詩を賦して云う。桃花香裏幾千家、錦幄氤氳十里斜、無頼狂風吹好事、亂驅紅雨過長江と、吟じ畢り還りて寝ね、暴に死す。晉平公と追贈す。沆初め僧たりし時宋愔の婢に通じご誼を生む。適妻てきさい(本妻)子無し。誼を以て嗣と爲す。

武人崔沆の寸評は遷都以來蒙古は出陸を督したが実現しなかった。高宗王より「大藏經板雕造の告成、江都築城等の功」を賞されたが辭して受けなかった。晉平公と追贈された。沆は僧たりし時、婢と通じて誼を生んでいる。適妻子は無く、誼を嗣と爲している。沆の行動は「譖を信ず。凡そ私憾(怨)ある者は輒ち乱を謀ると誣告し、以て賞を邀める。鞫めるに及んで驗無し」といわれ、反対者を謀乱者として誣告して、制裁をくわえていた人物といえよう。

(4) 崔誼 (?-1258) (高宗45)

崔誼さいぎは高宗代の権臣である。晉陽侯沆の子である。母は婢である。高宗18 (1231年)から蒙古の侵入が始まり、その戦乱の中で高宗45 (1258年) 誼は暗殺されて崔氏は滅亡してしまつた。「叛逆伝」によってその顛末をみて寸評を加えることにする。その伝記は凡そ次のようである⁽¹⁰⁾。

(史料4)

高麗の晉陽侯沆の子なり。沆初め僧となり、宋愔の婢と通じ誼を生む。沆の適妻子無し。誼を以て嗣と爲す。誼容貌美にして、性沈黙羞澁しゅうじゅう(はずかしがって、はきはしめない)多し。沆景淋師芮起をして詩筆を教えしめ、權韞任翊をして政事(治)を教え、鄭世臣をして禮を教えしむ。王誼を以て殿中内給事と爲す。沆嘗て誼を以て宣仁烈・柳能に屬して曰く、若し輔導成就し家業を承くを獲ば則ち君等の賜なりと。沆病むに及んで仁烈・能を召し手を執りて曰く、君等此子を保護せば、吾死するも恨無しと。沆死す。殿前崔良白祕して喪を發せず。劔を按じ(劔をぬこうとする)侍婢を叱して哭く勿らしめ、仁烈と謀りて沆の言を以て門客(門下にいる食客)大將軍崔瑛・蔡楨及び能等に傳え夜別抄神義軍書房三番都房三十六番を會して擁衛し、乃ち喪を發す。王誼に借將軍を授け、又命じて教定別監と爲す。百官皆門に詣りて吊賀ちやうが(慶弔)す。沆は本と妓の出、誼の母亦賤なり。故に時人簿書(文書)を讀み、倡伎賤隸の言に至れば輒ち之を諱む。人仇怨有れば則ち譖するに公の出ずる所微賤を嘗るを以てすれば、誼盡く之を殺す。誼倉を發して飢民を賑わ

し、又諸領府に各三十斛を給す。王誼を以て樞密院副使判史兵部御史臺事と爲す。讓りて受けず。誼復た延安の宅及び靖平宮を王府に歸し、其の家米二千五百七十餘石を内莊院に、布帛油蜜を大府寺に納る。又年饑うるを以て、私廩を發ひらいて權務隊正遞仗左右衛神虎衛校尉以下及び坊里人を賑わす。尋で樞密院副使を拜す。又辭して受けず。右副承宣を改め授く。誼將軍邊軾・郎將安洪敏・散員鄭漢珪を以て江華收獲使と爲し、其の攘奪を恣にす。百姓嗷々ごうごう（衆人のそしる声）たり。舊制奴婢は一功有りと雖も、賞するに錢帛を以てし官爵を授けず。沆始めて其の奴李公柱・崔良伯・金仁俊を除して別將と爲す。聶長守を校尉と爲し、金承俊を隊正と爲す。奴等誼に白して曰く、公柱、身三世に事え、年老いて功有り、請う參職を加えよと。乃ち郎將を授く。奴隸の參官を拜する此より始まる。誼年少暗劣、賢士を禮遇せず。與に親信する所の者は柳能・崔良伯の輩の如く、皆庸碌輕躁なり。其の舅巨成・元拔等内に讒訴を行い、外に威福を恣にす。又歲の飢饉に遭いしが粟を發きて賑貸せず。是に由りて大に人望を失う。大將軍宋吉儒は金仁俊と善し。慶尙道水路防護副監と爲り、夜別抄を率いて州縣を巡り、民を督して入りて海島を保たしむ。令に従わざる者は皆之を撲殺し、又人の土田財物を奪い、侵剝しんはく（おかしうばい取る）厭く所無し。按察使宋彦庠都兵馬使に効報す。金仁俊密に大司成柳璣・待制柳能に謂て曰く、吉儒は吾が善き所なり、聞く按察の効書已に都堂（都評議使司）に至ると。若し遽に發すれば勢い營救し難し。吾將に閑に乗じて令公に白さば、庶くは免かるべし。願くは之を圖れと。璣等仁俊兄弟が誼に近昵するを以て、陰に堂吏を戒めて稟するを停む。巨成・元拔之を聞き、以て誼に告ぐ。誼怒りて吉儒を楸子島に流し、璣能仁俊を罵りて曰く、吾れ爾が輩を以て腹心と爲す。何ぞ專擅なること是くの如きやと。是より惡んで接見せず。神義軍都領郎將朴希實・指諭郎將李延紹、密に璣・仁俊・承俊・公柱・將軍朴松庇・都領郎將林衍・隊正朴天湜・別將同正車松祐・郎將金洪就、仁俊の子大材・大用等に謂て曰く、誼せん儉小を親近し、讒を信じて忌多し。早く之が所を爲さざれば、吾曹も亦免かれずと。遂に計を定め、約するに四月八日觀燈の夕を以て事を擧げんとす。中郎將李柱之を聞き、牽龍行首崔文本等と書を爲りて誼に通ず。良伯は大材の妻の父なり。大材、希實等の謀を以て良伯に告ぐ。良伯佯り應じ、以て誼に告ぐ。誼急に柳能を召して計を議す。時に日已に暮る。能の曰く暮夜能く爲す無し。請う書を以て夜別抄指諭韓宗軌に諭し、暹明李日休等を召し、兵を勅して仁俊を討つも未だ晩からざるなりと。誼之を然りとす。大材の妻側に在りて之を聞き以て大材に告ぐ。大材仁俊に告げて曰く、事急なり。早く圖るに如かずと。既に昏れて仁俊子弟を率いて神義軍に趨き、希實・延紹を見て云う。事洩れたり猶豫すべからずと。乃ち向に謀まきに與る者及び別將白永貞・隊正徐挺・李梯・林衍及び指諭趙文柱・吳壽山を召集し宗軌を捕えて之を殺し、又指諭徐均漢等を召し、三別抄を射廳に會し、人をして道に呼ばしめて曰く、

令公死せりと。聞く者皆集る璪・松庇等と亦至る。仁俊曰く、此の如き大事は主者なかるべからず。大臣の威望有る者を推し以て衆を領すべしと。即ち樞密使崔暉を召す。暉至る。又朴成梓を邀えて之を議す。仁俊、長伯を召す。未だ堂に升るに及ばざるに、別抄の兵炬を以て口を焼き、遂に之を斬る。衍又日休を其の家に斬る。仁俊誼の門卒をして更籌を報ぜざらしめ、隊伍を廣場に分ち、松明を燃して明晝の如し。衆人呼噪す。適ま大霧にして誼の家兵一人の知る者無し。黎明夜別抄等誼の家壁を壊りて入る。元拔は壯士たり。難を聞いて驚き起き、劔を抜きて戸に當る。兵前むを得ず。元拔勝たざるを度り、誼を擔いて走り避けんと欲す。誼體肥重なるを以て未だ能くせず。乃ち扶けて屋葺（積み草）に上し、又自ら戸に當る。壽山突入して元拔を撃ち額に中る。拔垣を躓えて走る。別抄追いて江岸に斬る。又誼及び能を求めて皆之を殺す。璪・仁俊・暉闕に詣る。百官俱に泰定門外に會す。兩府及び璪・仁俊、入りて便殿に謁し、政を王に復す。王、誼の倉穀を發きて之を分賜する差あり。崔氏六十餘年の業此に至りて滅ぶ。

武人崔誼は高宗王代の人物であるが蒙古の侵入が始まり、その戦乱の中で高宗45(1258年)に暗殺され崔氏政権は滅亡してしまう。かくして、「政を王に復」し武人政権は蒙古と結ぶ国王派に倒され、消滅した。

(ii) 「叛逆」(三)の人物分析

「叛逆伝」(三)に見える崔忠献は崔氏武人政権の創立者であった。父は上將軍で忠献は武臣の家の出身である。趙位寵の乱を鎮圧して武名をあげた人物である。その後武人李義政を暗殺し、政権を掌握するに到っている。忠献は崔氏武人政権の創立者であった点に大きな意義があった。彼は「權傾人主」として君臨し、恐怖政治を実施した人物であった。次の崔瑀は樞密院副使に累遷しており、崔氏武人政権を継承した。瑀の代から政庁という政庁を私邸におき人事を処理した点に大きな意義があった。彼は武人出身の為、「当代の名儒」を招聘し、「書房」に滞在させて施政の助言者として文人達を取りこんでいった人物であった。次に、崔沆は中書令になっている。高宗王より「大藏經板雕造の告成、江都築城等の功」を賞されたが辞して受けなかった。沆は僧の時、婢と通じて誼を生んでおり本妻に子が無かったので誼を以て嗣とした。誼は譜を信じ私怨ある者は謀乱者として誣告され、その罪を調べるに「驗無し」といわれた。私怨ある者は容赦なく謀乱者として制裁をくわえた人物であった。次に、崔誼は母は婢である。高宗18(1231年)から蒙古の侵入が始まり、その戦乱の中で高宗45(1258年)誼は暗殺されて崔氏は滅亡してしまう。4代にわたる武人政権は蒙古と結ぶ国王派に倒され消滅した。「叛逆伝」(三)の人物分析をふまえて小結論とする。

小 結 論

「叛逆伝」(三)の4名は所謂崔氏武人政権の創立から滅亡までの中心人物である。高麗

王朝区分では第三期の武臣政権の成立期とモンゴルの支配期に入る時期である。

この立伝人物4名は武臣で、崔氏武人政権創立者の崔忠獻をはじめに瑀、沆、誼の4代にわたって政権を握った人々である。

武人政権が政権を獲得する土台は第1点は門閥官僚社会からはみでた門客、悪少、死士と云った人々が崔氏の私兵集団となった。第2点は武人は農荘と呼ばれる私的所有地を持ち、その収穫物を私兵の経費にあてた。反面、国王から高い官爵をもらい地位を強めて私兵や農荘をふやした。王朝の権威に依存する性格が強かった。

一方、門閥官僚社会の権力機構の中で瑀の代から「政房」という政庁を崔氏の私邸におき官員の人事を処理する「政房政治」を実施した。また、武臣による「大土地所有」経営がおこなわれ王朝権力に寄生して自己の田租を確保する寄生官人とはあきらかにことになっていた。

武人の「所有地経営」の内容が門客や奴隸を使用して経営していた古い関係や農民の一揆や反乱に対して徹底的に崔氏武人政権は弾圧した。歴史を動かす農民の一揆や反乱勢力を弾圧し「王朝守護者」となってしまった崔氏武人政権の評価と限界がそこにあったと考える。武人政権創立者である崔忠獻は「権傾人主」として君臨し、恐怖政治を実施した人物であった。第2代の瑀（怡）は「政房」を私邸におき人事を処理した。「当代の名儒」を招聘し、施政の助言者として文人達を取りこんだ人物であった。第3代の沆は反对者を譖により謀乱者として制裁をくわえた人物であった。第4代の誼の時にあって彼は暗殺され、武人政権は蒙古と結ぶ国王派に倒されて消滅したのである。他方、武人政権期においても文臣の地位の成長が見られる点が指摘されているのは注目されよう⁽¹¹⁾。

「叛逆伝」(四)以下に見える立伝人物の分析を通して「叛逆の特長」と「社会の矛盾構造」について解明したいと思う。今後の検討課題としたい。

註

- (1) 末松保和博士古稀記念会編『古代東アジア史論集』上巻所収。吉川弘文館、1978年。
- (2) 旗田巍先生古稀記念会編『朝鮮歴史論集』上巻所収。龍溪書舎、1979年。
- (3) 伊藤亜人・大村益夫其他監修『朝鮮を知る事典』〔新訂増補〕旗田巍著「武人政権」の項、367～8頁参照。
- (4) 前掲書、368頁参照。
- (5) 金鍾国著『朝鮮学報』第17輯、1960年。
- (6) 金鍾国著「高麗武臣政権と僧徒の対立抗争に関する一考察」『朝鮮学報』第21・22輯参照、1961年。
- (7) (史料1)

崔忠獻

崔忠獻、初名、鸞、牛峯人、父元浩、上將軍、忠獻、蔭補良醞令、明宗四年、元帥奇卓誠、擊趙位寵、聞忠獻勇敢、選補別抄都令、以勞、累遷攝將軍、弟忠粹、爲東部録事、

性猜險勇悍，二十六年，李義叟子，將軍至榮，奪忠粹家鴉鵲，忠粹請還，言甚悖，至榮怒，令家僮縛之，忠粹曰，非將軍手縛，誰敢縛我，至榮，壯面釋之，忠粹，即告忠獻曰，義叟四父子，實爲國賊，我欲斬之，何如，忠獻難之，忠粹曰，我志已決，不可中止，忠獻，乃然之，會，王，幸普濟寺，義叟，稱疾不扈從，潛往彌陀山別墅，忠獻，與忠粹及其甥隊正朴晉材·族人盧碩崇等，袖刃，至別墅門外，候之，義叟將還，出門欲跨馬，忠粹突入，擊之不中，忠獻，直前斬之，從者數十人，股弁皆潰，使碩崇，持首馳入京，梟于市，觀者驚噪，聲振都下，扈從者，聞變潛遁，王，亦趣駕遷宮，忠獻·忠粹，馳馬露刃，至十字街，見監行領將軍白存儒，告以故，存儒，樂從之，召集將士，忠獻·忠粹，率兵，詣宮門，奏曰，賊臣義叟，曾負弑逆之罪，虐害生民，窺覬大寶，臣等，疾視久矣，今爲國家討之，但恐事泄，不敢請命，死罪死罪，王，慰諭之，仍請與大將軍李景儒·崔文清等，討餘黨，遂與之坐市街，召募，壯士響應，於是，諸衛將卒，亦皆畢集，膝行聽命，莫敢仰視，乃閉城門，分捕支黨，悉獲之，忠獻·忠粹，與文清·景儒，會仁恩館議事，有人告云，平章事權節平·孫碩·上將軍吉仁等，謀舉兵，又告景儒等有異謀，忠獻，即召節平子將軍準·碩子將軍洪胤，與之飲，言笑自若，俄面目左右，皆拉殺之，又斬景儒於坐，以文清老且直，釋不殺，忠獻等，坐市幕，分捕節平碩及將軍權允·柳森相·御史中丞崔赫尹等，殺之，時，吉仁，在壽昌宮，聞變，急即與上將軍俞光·朴公襲等，擅出武庫兵仗，以授禁軍及宦官·奴隸，凡千餘人，諭曰，今忠獻作亂，多殺無辜，禍將及汝，宜各戮力，以立大功，乃率衆，出宮門，踰沙嶺，向市街，忠獻等，勒兵迎戰，以敢死者十餘人，爲先鋒，揮劍大呼，突陣而前，仁衆，望而四潰，仁·光·公襲，馳入壽昌宮，閉門拒守，忠獻等，率衆圍之，存儒，欲以火攻之，仁懼，踰垣而遁，王，使人開門，召忠獻·忠粹，忠獻等，疑仁在內，使郎將崔允匡入奏，賊臣義叟跋扈，臣，舉兵誅之，其黨忌臣，反欲加害，然上天不助，兇徒自潰，尚有餘黨，潛側於內，請入宮搜捕，王，許之，遂使允匡，縱兵闖入，隨遇輒殺，僵屍狼藉，光與公襲自刎，王左右，皆散走，唯小君及宮姬數人，侍側垂泣而已，忠獻等引兵，還仁恩館，捕叅知政事李仁成·上將軍康濟·文得呂·左承宣文迪·右承宣崔光裕·大司成李純祐·大僕卿潘就正·起居郎崔衡·郎中文洪賁等三十六人，囚于館，仁至北山，剃髮被縊，墮巖下死，忠獻，又殺上將軍周光美·大將軍金愈信·權衍等，有僧告，吉仁，欲率王輪寺僧徒，舉事，請備之，忠獻大怒，遂殺所囚仁成等三十六人，遣人周王輪寺，覘之，僧皆方食在堂，帖然無變，忠獻，知其誣，欲收斬，告者已遁矣，文迪妻崔氏，就積屍間，覓夫屍，戴之而去，觀者流涕，忠獻聞之白，烈女也，令收葬之，忠獻，又流判衛尉事崔光遠·少卿權信·將軍權混·杜應龍·郎將崔婁于南裔，忠獻，多殺朝臣，人心洶懼，遣使諸道，慰安之，忠獻，與忠粹，上封事曰，伏見，賊臣義叟，性鷲忍，慢上陵下，謀搖神器，禍焰熾然，民不聊生，臣等，賴陛下威靈，一舉蕩滅，願陛下，革舊圖新，一遵太祖正法，光啓中興，謹條十事以奏，昔，祖聖，統一三韓，卜神京於松嶽郡，於明堂位，作宮闕，爲子孫君王萬世所御，頃者，宮室災，又從而新之，一何壯麗，而信拘忌之說，久違臨御，安知有負於陰陽耶，惟陛下，以吉日入御，承天永命，本朝官制，計以祿數，比乃差舛，兩府及庶位，間有剩置，廩祿不足，爲弊甚鉅，惟陛下，準古減省，量宜除授，先王，制上田，除公田外，其賜臣民，各有差，在位者貪鄙，奪公私田，兼有之，一家膏沃，彌州跨郡，使邦賦削，而軍士缺，惟陛下，勅有司，會驗公文，凡所見奪，悉以還本，公私租賦，皆由民出，民苟困竭，顧安所取足，吏或不良，惟利之從，動輒侵擾，又勢家奴息，爭徵田租，民皆嗷然愁痛，惟陛下，擇良能，以補外寄，毋令勢家，破民產，國家，分遣使，統兩界，察五道，欲吏姦抑，民瘼沮而已，今諸道使等，應察不察，但誅求，以供進爲名，勞郵以輸，或充私費，惟陛下，禁諸道使供進，專以覈問爲職，今一二

浮圖，山人也，常徘徊王宮，而入臥內，陛下惑佛，每優容之，浮圖者，既冒寵，屢以事，干穢聖德，而陛下，勅內臣，勾當三寶，以穀取息於民，其弊不細，惟陛下，斥群髡，使不跡于宮，毋得息穀，比聞，郡國吏，多逞貪，廉恥道息，諸道使，置不問焉，設有仁而清者，亦不之知，使其惡肆，而清無益，柰戒勸何，惟陛下，勅兩界都統，五道按察使，按吏能否，具以狀聞，能者擢之，否者懲之，今之廷臣，並不節儉，修第宅，理服玩，飾以珍寶，而夸異之，風俗傷敗，亡無日矣，惟陛下，具訓于百僚，禁奢侈，尚儉嗇，在祖聖代，必以山川順逆，創浮圖祠，隨地以安，後代，將相群臣，無賴僧尼等，無問山川吉凶，營立佛宇，名為願堂，損傷地脉，災變屢作，惟陛下，使陰陽官檢討，凡禱補外，輒削去勿留，無為後人觀望，省臺之臣，主言事故，上或不逮，則有敢諫，雖干鐵逆鼎，所甘心焉，今皆媵婀低昂，以苟合為心，惟陛下，擇其人而後，使直言在庭，臨事或折，書奏，王，嘉納之，忠獻，以內侍戶部侍郎李尙敦·軍器少監李芬·祇候元侻等五十人，皆以勢冒進，不應為內侍，奏黜之，又以王子僧小君洪樞·洪樞·洪規·洪鈞·洪覺·洪貽等，在內干政，奏還本寺，又以嬖僧雲美·存道，出入王宮，朝臣多附，并黜之，是年，拜左承宣，尋知御史臺事，明年，制曰，左承宣崔忠獻·大將軍崔忠粹，疾惡如讎，手斬義旼，以安宗社，可賜忠獻忠誠佐理功臣，忠粹輸忠贊化功臣，贈其父元浩，奉議贊德功臣·守太尉·門下侍郎，並圖形閣上，一日，忠獻，欲往興王寺，慶成佛像，有人，投匿名書云，興王寺僧統寥一，與中書令杜景升，謀害，忠獻乃止，忠獻·忠粹，欲廢王，設醮告天，是夕，大雷電雨雹，暴風拔木，墻屋多頽，後七日，又大雷電，忠粹，與晉材，往謀於忠獻曰，今上，在位二十八載，老而倦勤，諸小君，常在上側，竊弄恩威，以亂國政，上，又寵愛群小，多賜金帛，府軍虛竭，不可以主臣民，且太子璿，嬖群婢，生子九人，各投小君，祝髮為弟子，性又闇弱，不宜為儲副，司空縝，博通經史，聰明有度量，若立為王，國可中興矣，縝婢，為忠粹所嬖，故欲立之，忠獻曰，平涼公旼，上之母弟，宏略大度，有帝王之量，且其子淵，聰明好學，宜為儲副，議未決，晉材曰，縝與旼，皆可為君，然金，不知有縝，若立縝，彼必以為篡，不如立旼，如毅宗故事，以弟及，告之，則無患矣，議乃定，忠獻·忠粹，與晉材·碩崇及其族人金躍珍等，勒兵市街，為中軍，分諸衛兵，為左右前後軍，屯于四街，又遣將卒，閉諸城門，召杜景升，流紫燕島，又流樞密副使柳得義·將軍高安祐·大將軍白富公·親從將軍周元迪·將軍石城柱·侍郎李尙敦·郎中宋躋·廉克鬻·御史申光漢等十二人，及大禪師淵湛等十餘僧于嶺南，又配洪機等小君十餘人于海島，忠獻·忠粹，遣人，入闕逼王，以單騎，出向成門，幽于昌樂宮，使中禁指諭鄭允候，守之，時，太子璿，在內園北宮，使人督之，與妃步出宮門，冒雨乘驛騎，放于江華島，迎平涼公旼，即位于大觀殿，是為神宗，以子淵，為太子，忠獻·忠粹，擁兵入樞密院，令諸衛將軍，屯干毬庭，忠獻，奏黜內侍閔混等七十餘人，又以俗傳，王飲炬艾井，則宦者用事，乃毀之，以廣明寺井，為御水，俚語，藤梨謂之但艾，王，以忠獻，為靖國功臣，三韓大匡中大夫上將軍柱國，忠粹，為輸誠濟亂功臣，三韓正匡中大夫鷹揚軍大將軍衛尉卿知都省事柱國，晉材，為刑部侍郎，贈元浩，英烈佑聖功臣，三重大匡門下侍中，忠獻，又流樞密院使崔漣于昇州，初，太子，娶昌化伯祐女，為妃，至是，忠粹，欲以女配太子，固請于王，王，不悅，忠粹，佯謂內人曰，上，已出太子妃否，內人以告，王，不得已出之，妃，嗚咽不自勝，王后，亦流涕，宮中，莫不垂淚，妃，遂微服出外，忠粹，即定期聚工，大備裝具，忠獻聞之，攜酒，至忠粹家，從容與飲，酒酣，忠獻曰，聞君，欲納女東宮，有諸，對曰，有之，忠獻，曉譬之曰，今我兄弟，雖勢傾一國，然系本寒微，若以女，配東宮，得無譏乎，況夫婦之間，恩義有素，太子，配耦有年，一朝離之，於人情何，古人曰，前車覆，後車戒，向者，李義方，以女配太子，卒死人手，今欲踵其覆轍，可乎，忠粹，仰天太息，良久

曰，兄言有理，敢不從，遂罷遣工匠，既而，翻然改圖曰，大丈夫行事，當自斷耳，復集工人，督辦如舊，其母，謂之曰，汝從兄言，予實喜之，又何如此耶，忠粹怒曰，非婦人所知，以手推之仆地，忠獻，聞之曰，罪莫大於不孝，今辱母如此，況於我乎，必不可以言語，諭之，明朝，當令吾衆，候廣化門，拒其女，不納，人，以告忠粹，忠粹，亦謂其徒曰，人，於吾行止，莫敢誰何，兄，獨欲制我者，恃其有衆也，詰旦，吾當掃除其徒，爾等努力，人，又告忠獻，忠獻，泣謂其衆曰，忠粹，欲以女，配東宮者，無他，欲以圖不軌也，明朝，欲掃吾徒，事已急矣，計將安出，衆曰，請與朴晉材謀，忠獻，即召晉材及躍珍·碩崇，告之，晉材曰，公兄弟，均吾舅也，有何厚薄，然國家安危，係此一舉，與其助弟，而爲逆，孰若右兄而從順，且大義滅親，我當與躍珍·碩崇等，率衆助之，忠獻大悅，夜三鼓，忠獻，率兵千餘，由高達坂，至廣化門，告門者曰，忠獻，明朝欲作亂，吾將衛社稷，亟以此，達王所，門者以聞，王，大驚，即命開門納之，使屯於毬庭，又發武庫兵仗，授禁軍以備，諸衛將軍，亦率兵爭赴，忠粹聞之，懼，謂其衆曰，以弟攻兄，是謂悖德，吾欲奉母，入毬庭，見兄乞罪，汝等，宜各遁去，將軍吳淑庇·俊·存深·朴挺夫等曰，僕等，所以遊公之門者，以公有蓋世之氣，今反怯懦如此，是，族僕等也，請一戰，以決雌雄，忠粹許之，黎明，率兵千餘人，屯十字街，約曰，戮力以戰，苟殺彼黨者，當授所殺者職，忠粹軍，聞諸將皆歸忠獻，自知寡助，稍稍遁去，忠獻，出廣化門，向市街而下，忠粹，向廣化門而上，遇於興國寺南，交戰，晉材·躍珍·碩崇，各率徒衆，一踰泥峴，一踰沙峴，一踰高達坂，首尾相應，腹背攻之，忠獻，以御庫大角弩，縱射，矢下如雨，忠粹之徒，取步廊扉板，爲楯禦之，不克，遂大潰，忠粹曰，今日之敗，天也，兄居臨津以北，我居臨津以南，即與淑庇·存深等，馳至保定門，斬關而出，渡長湍，至坡平縣金剛寺，追者斬之，傳首于京，忠獻哭之，謂追者曰，我欲擒耳，何遽殺耶，乃遣人，收葬之，王，論功，詔有司，圖形，加父母爵號，陞知奏事知御史臺事，元年，私僮萬積等六人，樵北山，招集公私奴隸，謀曰，國家，自庚癸以來，朱紫，多起於賤隸，將相，寧有種乎，時來則可爲也，吾輩，安能勞筋骨，困於捶楚之下，諸奴，皆然之，剪黃紙數千，皆鋸丁字爲識，約曰，吾輩，自興國寺步廊，至毬庭，一時群集鼓噪，則在內宦者，必應之，官奴等，誅鋤於內，吾徒，蜂起城中，先殺崔忠獻等，仍各格殺其主，焚賤籍，使三韓無賤人，則公卿將相，吾輩皆得爲之矣，及期皆集，以衆不滿數百，恐不濟事，更約會普濟寺，令曰，事不密，則不成，慎勿泄，律學博士韓忠愈家奴順貞，告變於忠愈，忠愈，告忠獻，遂捕萬積等百餘人，投之江，授忠愈閣門祇候，賜順貞白金八十兩，免爲良，以餘黨不可悉誅，詔不問，明年，以兵部尚書知吏部事，朝往兵部，晝入吏部，注擬文武官，又出入禁闈，以兵自衛，先是，忠獻，疑金俊珩兄弟，有異志，貶俊珩黃州牧守，弟俊光尚州牧守，俊珩，不恤民事，募勇士，恆事遊畋，晉材門客，無慮數百，有神騎指諭李勳中者，最親昵，勳中，密召俊珩，欲作亂，時，俊光，移守安邊府，俊珩，陰與通謀，乃率黃州民驍勇者，潛入京，俊珩妻父郎將金純永，告忠獻，遣門卒，捕俊珩斬之，分捕其黨，或殺或流，悉籍妻子，爲奴婢，俊珩父平章事永存，以老免死，配黃驪縣，遣御史中丞康純義·內侍丁公弼等，捕俊光于安邊，俊光，到白嶺驛，聞事敗，乃還，公弼，詐稱祈恩別監，至安邊，俊光，備公服出迎，公弼，令抄奴縛之以來，拷問不服，殺之，勳中逃匿，後被執見殺，純永，以功拜將軍，公弼等五人，皆拜官有差，尋加忠獻，開府儀同三司，又明年，又加三重大匡守太尉上柱國，趙準者，忠粹女婿也，忠獻，欲官清要，除戶部侍郎右諫議大夫，忠獻，自知縱恣，恐其變生不測，凡文武官·閑良·軍卒，強有力者，皆招致，分爲六番更日，直宿其家，號都房，其出入，合番擁衛，如赴戰陣焉，四年，拜樞密使吏員兵部尚書御史大夫，五年，忠獻，始在私第，與內侍吏部員外郎盧瑄，注擬文武官以奏，王，領之，二部判事，坐政堂，但

檢閱而已，忠獻，獨專政柄，或因左右所托，或納賂稱意者，皆得拜官，嘗會客設宴，使重房有力者手搏，勝者，即授校尉隊正，以賞之，瑄，忠獻外親，起市井，性巧黠，善承迎，忠獻，甚寵愛，由是，不數年，驟遷吏部郎中，車馬輻湊，氣勢日熾，親戚皆顯，賄賂公行，後，出補安西都護府使，以琴儀代之，忠州判官崔孝基，因忠獻嬖妾月符，賂犀帶，忠獻悅，特徵還，屬內侍，龍虎軍卒仲美，詐稱忠獻所道，持兵刃，往鳳州日興倉，侵略百姓，斂銀帛，驛輸于家，有人執以告，忠獻，付街衢所按問，梟市三日，仍禁內外挾持兵刃者，忠獻女婿任孝明，登第，王，即屬內侍，下宣旨，權補閣門祇候，晉材，爲設賀宴，盛陳羅綺，忠獻，引賓客赴之，新及第，過者輒邀致，杯盤極侈，又自高達坂，至加造里，連亘結彩棚，大張伎樂雜戲，觀者如堵，慶州反，忠獻，會文武三品以上於其第，議之，皆曰，遣使諭之，然後可出兵，乃遣兵部郎中宋孝成·刑部員外郎朴仁碩，諭之，賊不從，忠獻，以大將軍金陟侯等，爲兵馬使，往討之，陟侯等，引兵發，忠獻，與子怡·晉材，登路傍樓觀之，大陳兵衛，以示威武，加守太傅叅知政事吏部判書判御史臺事，六年，進中書侍郎平章事吏部尙書太子少師，諸家僮因樵蘇，分隊習戰於東郊，忠獻聞之，遣人捕之，皆遁，只獲五十餘人，掠問，投于江，春州，舊隸安邊，州人，以道途艱險，厚賂忠獻，乃陞春州，爲安陽都護府，忠獻，一日詣王宮，御史臺官，迎候於麗景門，雜端琴儀，立語馬前，人譏其諂諛，七年，有衆三十餘人，會給事同正池龜壽家，謀殺忠獻，事覺，龜壽逃，人執其弟龜永，告忠獻，忠獻鞠之，龜永曰，將軍李光實，爲謀主，忠獻，捕詰之曰，吾素知爾不肖，但以故舊，授將軍，何敢爾耶，光實不能對，乃流海島，熙宗，立，進壁上三韓三重大匡開府儀同三司守太師門下侍郎同中書門下平章事上將軍上柱國判兵部御史臺事太子太師，王，以忠獻有擁立功，待以殊禮，常呼爲恩門相國，楊廣道按察使郭公儀，貪鄙，民多怨之，有司執其從吏，鞠之，公儀，嘗以博奕，善忠獻，故止笞其吏，元年，賜忠獻內莊田一百結，又授特進許謀逸德安社濟世功臣，門下侍中，晉康郡開國侯，食邑三千戶，食實封三百戶，忠獻，作茅亭于男山里第，旁蒔雙松，及第崔頤，賦雙松詩，兩制文士，皆和，忠獻，招耆儒白光臣等，使第之，及第鄭公賁詩，爲第一，忠獻，奏其詩，王，召公賁，屬內侍，二年，詔曰，門下侍中，晉康侯忠獻，當先君即政之時，及寡人繼統之初，以至於今，竭誠夾輔，有大功業，可立府，以崇賞典，命禮司及樞密院，立都監，遣使册忠獻，爲晉康公，立府曰興寧，置僚屬，以興德宮，屬之，忠獻，迎命于男山第，諸王，皆詣其門，禮畢，宴册使，贈犀帶·白金·綾絹·鞍馬甚厚，其餘，讀册以下，諸執事，亦贈白金·綾絹有差，夜，更宴諸王，因奏留使副，其帳具·花束·絲竹·聲伎之盛，自三韓以來，人臣之家，所未有也，自後，忠獻，出入宮禁，便服張蓋，侍從門客，殆三千人，時，以譯語內殿崇班于光儒，權知閣門祇候，省郎議，光儒南班員，今拜叅職，非舊例，不署告身數月，忠獻，謂省郎曰，光儒，頃者北朝使，有專對之能，故授叅職，何堅執常制耶，省郎，即署之，王，加忠獻中書令晉康公，忠獻，辭不拜，明年，復以爲中書令晉康公，忠獻曰，公者，五等之首，中書令，人臣之極，遂辭不拜，先是，有人帖匿名榜云，將軍朴晉材，謀去舅崔忠獻，由是，兩家構隙，至是，晉材，爲大將軍，門客，幾於忠獻，而率皆勇悍，晉材，恨門客除官者少，常快快不平，酒酣，輒言忠獻無狀，且自謂，若無忠獻，可專國柄，欲圖之，流言曰，舅氏，有無君心，每語門客曰，寧無一日之榮乎，忠獻，知其必害己，召晉材，晉材，謁於階下，忠獻，呼使前曰，汝，何欲害我，遂命左右縛之，斷其腳筋，流白翎鎮，居數月，病死，分配門客勇悍者于遠島，四年，王，移御怡第，忠獻，迎駕獻壽于闊洞私第，諸王幸樞，皆侍宴，翼日乃罷，錦繡綵棚，胡漢雜戲，窮極侈異，後數月，王，宴幸樞，觀擊毬，賜忠獻玉帶一腰·通天綉帶一腰·南鋌十五斤·盛香金鏤銀盤二，五年，青郊驛吏三人，謀殺忠獻父子，詐爲公牒，招募諸寺僧徒，牒至歸法寺，僧執賣牒者，告忠

獻，即置教定別監于迎恩館，閉城門，大索其黨，青郊人，誣構右僕射韓琦，忠獻殺琦及三子，又殺將軍金南寶等九人，分配從者于遠島，明年，有人投匿名書于忠獻家曰，直長同正元譚，與宰相于承慶，謀殺忠獻，忠獻，捕譚問之，譚，仰天嘆曰，此必我仇人庾益謙所爲也，益謙，嘗貸我銀瓶二事，積年未償亡去，予，屢責妻子，取其家，此必益謙所爲也，忠獻遣人，搜益謙家，果得書草，乃流于島，忠獻嘗營第于闊洞，毀人家百餘，務爲宏麗，延袤數里，擬於禁掖，北臨市塵，構別堂，號十字閣，土木役劇，國內嗷嗷，訛言密捕童男女，衣以五色，埋四隅，以禳土木氣，凡有兒者，皆深匿之，至有抱負遠遁，或無賴輩，詐捕小兒，其父母驚懼，賂以厚幣，乃棄去，忠獻，令御史臺，榜市街曰，人命至重，豈有埋地禳禳之理，有捕兒者，執以告，自後，妖言稍息，忠獻，權傾人主，威振中外，人有違忤，即見誅戮故，皆鉗口不言，盧仁祐，大將軍俊之子也，以其姻戚，昵居左右，佯狂屢直語，忠獻惡之，謫守仁州，秩滿還朝，忠獻，營三第，多藏金玉錢穀，謂左右曰，除府庫所藏外，金銀珍寶，欲獻王府，以助國用，何如，衆皆曰善，仁祐曰，未若留爲經費，更不歛民之爲愈也，忠獻慚報，一日，忠獻，以事詣壽昌宮謁王，有頃，王，入內，中官，給忠獻從者曰，有旨賜酒食，乃引深入廊廡間，俄有僧俗十餘人，持兵突至，擊從者數人，忠獻，知有變，倉皇奏曰，願上救臣，王，默然，閉戶不納，忠獻，無以爲計，匿於知奏事房紙障間，有一僧三索，竟不獲，躍珍及怡舅知奏鄭叔瞻，在重房，聞事急，即入扶忠獻以出，忠獻黨指諭申宣胄·奇允偉等，與僧徒，相格鬪，忠獻都房六番，皆集宮城外，不知忠獻生死，有茶捧盧永儀者，初隨忠獻入內，登屋大呼曰，吾公無恙，於是，都房，爭入救之，僧徒敗走，躍珍，謂忠獻曰，我將軍兵入宮，盡殺宮中人，且行大事，忠獻曰，若爾，國將何如，恐爲後世口實，汝母輕往，使上將軍鄭邦輔等，捕司鑰鄭允時及中官，因于仁恩館，鞫之，乃內侍郎中王濬明，爲謀主，禮政于承慶·樞密史弘績·將軍王翊等，皆知其謀，忠獻，怨王廢之，遷江華，尋遷紫雲島，放太子社于仁州，德陽侯恕于喬桐，始寧侯禕于白翎，遣怡及平章事任濡，奉漢南公貞于私第，卽位於康安殿，是爲康宗，流濬明及承慶·弘績·翊等于外，王，改忠獻興寧府，爲晉康府，賜文經武緯衛理措安功臣號，高宗元年，封忠獻妻任氏，爲綏成宅主，王氏，爲靜和宅主，任氏，本將軍孫洪胤妻也，忠獻，殺洪胤，聞其美私之，王氏，康宗庶女也，忠獻，移入別第，劔戟兵衛，彌滿數里，朝士追隨者甚衆，前此，無宰相隨之者，至是，簽書樞密院事琴儀·樞密院副使鄭邦輔，始從之行，時人鄙之，忠獻，遣將軍李光裕，遷熙宗于喬桐，光裕還言，王，驚愕失措，且供頓闕乏，止有米六石，忠獻，變色厲聲曰，非我仁怨，王父子，得保首領，以至今日乎，追思濬明事，使我毛髮盡豎，三年端午，忠獻，設鞦韆戲于栢井洞宮，宴文武四品以上三日，忠獻，時有出入重房·將軍房，必結綵棚以迎，大設宴會，其遷，亦如之，忠獻，嘗自謂，國富兵強，每有邊報，輒罵曰，何以小事，煩驛騎，驚朝廷，輒流告者，邊將解體曰，必待敵兵陷兩三城，然後乃可飛報，至是，契丹兵入寇，京城無備，人情恟懼，皆怨忠獻，初，李至榮，爲朔州分道將軍，楊水尺，多居興化雲中道，至榮謂曰，汝等，本無賦役，可屬吾妓紫雲仙，遂籍其名，徵貢不已，至榮死，忠獻，又以紫雲仙爲妾，計口徵貢滋甚，楊水尺等大怨，及契丹兵至，迎降鄉導，故悉知山川要害，道路遠近，楊水尺，太祖，攻百濟時，所難制者遺種也，素無貫籍賦役，好逐水草，遷徙無常，唯事畋獵，編柳器販鬻爲業，凡妓種，本出於柳器匠家，後，楊水尺等，帖匿名書云，我等，非故叛逆也，不堪妓家侵奪，故投契丹賊，爲鄉導，若朝廷，殺妓輩及順天寺主，則可倒戈輔國矣，忠獻聞之，乃歸其妓紫雲仙上林紅于其鄉，順天寺主，亦恃勢自恣，與妓爲亂者也，聞之亡去，時，遣將禦契丹兵，驍勇者，皆忠獻父子門客，官軍，羸弱不可用，忠獻，閱家兵，自左梗里，至右梗里，作隊數重，連亘二三里，槍竿懸銀瓶，或三或四，誇示國人，以募兵，怡兵，自選地橋，至崇仁門，用

旗鼓習戰，門客，有請從官軍者，卽流遠島，忠獻，閱戰于其家，門階高峻，馬不得上，以人作馬狀，進退相戰，又假作契丹將軍，佩金牌形，擒斬之，奏凱班師，又令群妓，作蓬萊仙女來賀狀，忠獻樂甚，賞以銀瓶，紬布，侍御史金周鼎，着黃背衫入卒伍中，踴躍進退，識者鄙之，平州，擒送契丹二人，其人云，我軍，約以今月晦日，將犯京城，忠獻聞之，使宣胄·允偉等，勒兵市街，忠獻父子，擁兵數萬以自衛，怡，耀兵于宣義門外，四年，忠獻父子，在其第，盛陳兵甲戒嚴，時，契丹兵逼近，令百官守城，又毀城底人家，開鑿隍塹，與王·弘圓·景福·王輪·安養·修理等寺僧之從軍者，謀殺忠獻，佯若奔潰者，曉至宣義門，急呼曰，契丹兵，已至矣，門者，拒不納，僧徒鼓噪，斬關而入，殺門者五六人，有郎將金德明，嘗以陰陽之說，媚忠獻，官至知太史局事，所進新曆，皆變舊法，日官及臺諫，心知其非，畏忠獻，莫敢言者，又數興工役，侵耗諸寺，故僧徒怨之，先毀其家，然後，向忠獻家，纔至市街，爲巡檢軍所逐，奔至新倉館與戰，忠獻，遣家兵，挾擊之，僧魁，中流矢仆，其徒，奔至宣義門，縣門下，不得出，遂皆散走，忠獻軍，追斬三百餘僧，擒其黨鞫之，辭連中軍元帥鄭叔瞻，明日，忠獻，閉城門，大索僧之逃者，皆殺之，會大雨，流血成川，又斬僧三百餘人於南溪川邊，前後所斬，幾八百餘，積屍如山，人不得過者數月，發大倉，給家兵及留京五領軍，五日糧，晝夜戒嚴，天甚寒，士卒，斫路傍柳，又竊公家材木，藝以自溫，契丹兵，追至宣義門，焚黃橋而退，朝野大振，先是，德明，告忠獻曰，顯宗葬安奈，以致庚戌契丹兵，今葬厚陵於其側，契丹兵又來，恐風水使然，宜速改葬，忠獻然之，欲改葬，令卜日，司天臺，持疑，不卽卜日，乃流判事崔季良于高鶯島，後又流大將軍李孚于島，孚，有智勇，善射御，得士卒心，可屬大事，聞者惜之，王，賜忠獻子將軍珣及宣胄·允偉·朴世迪·崔俊文等五領軍，米人一石，布一匹，忠獻，集諸軍賜之，允偉軍卒，無故呼喊，忠獻，擅令停賜，舊例，都目政，在歲抄，忠獻，以兵禍，人無行貨求官者，乃託賊遷延，至明年正月，始開都目，多受人賂，托以戰功，不次除官，雖有功，非賂終不得職，尋以年滿七十，陽欲告老致政，王，知其意，命有司，備禮儀，賜几杖，令出視事，忠獻使怡，巡閱城廊兵器，以私卒自衛，帶甲者，連亘數里，忠獻，欲得武士心，以郎將大集成等五人，爲借將軍，集成，以無本領，不問僧徒奴隸，許爲屬卒，中外大擾，家家杜門，至有不得樵牧者，忠獻聞之，怒奪其職，六年，王，賜忠獻姓王，時，趙冲，破契丹兵凱還，忠獻忌功，停迎迓禮，私宴將帥于竹坂宮，斂銀百官，以供其費，初，冲，欲留西京，第其軍功，忠獻，恐生變，飛書趣還，及論軍功，忠獻主之，有功者無賞，人多怨之，校尉孫永等十人，醜飲於市，酒酣嘆曰，頃與契丹戰，有功，以無賂不得官，坐中人，告忠獻，忠獻，遣家兵捕之，并其同類百餘人，斬於保定門外，郎將奇仁甫，謀誅忠獻，不克見殺，忠獻有疾，上表辭職，還几杖，又請還賜姓，悉放內外囚，以至配島者，時，月犯熒惑，日官奏，貴人死，忠獻，召集樂工數十，奏樂竟日，至夜三鼓，樂未闕，果死，年七十一，諡景成，百官，縞素會葬，祕器羽葆鼓吹旗常，擬於王者，忠獻，初娶上將軍宋清女，生怡·珣，任氏生城，王氏生球，珣娶宗室壽春侯沆女，封寶城伯，城，後改瑋，尙熙宗女，齒宗室，親迎日，諸王·宰樞·百官，具公服以從，初封永嘉伯，後進封爲侯，子該，封宣春侯，高宗四十五年，瑋死，中書省奏，瑋以父勢，強尙公主，不可葬以諸王，制可，球，官至守司空柱國，忠獻死，降授球工部侍郎，宋清弟洪烈，藉忠獻，拜樞密副使，侍勢驕橫，凡有求忠獻者，必因洪烈乃成，由是，諸王貴戚，爭先交結，性又滑稽，每至諸王第，見珍玩，必丐奪而後已，故諸王，聞洪烈至，則趨左右，收珍寶，乃出迎。

(8) (史料2)

怡

怡，初名瑀，累遷樞密院副使，高宗六年，忠獻有疾，密謂怡曰，病將不瘳，恐有蕭牆之

患，汝勿復來，怡，遂稱疾不就，令其女婿將軍金若先侍疾，忠獻婢桐花，貌美，里人多通，忠獻，亦私之，一日戲曰，汝以誰爲夫耶，婢，以輿海貢生崔俊文對，忠獻，卽召俊文，留於家，奴使之，補隊正，至大將軍，日見寵任，請謁者，皆附之，俊文，於忠獻家側，大營私第，交結勇士，與上將軍池允深·將軍柳松節·郎將金德明，爲忠獻羽翼，及忠獻病，四人謀曰，公棄世，吾輩，必爲怡所蠶粉，季子珣，膽氣過人，可屬大事，因闢怡候疾，欲除之，遣人報怡曰，令公秒篤，欲見公，報之再三，怡，愈疑不至，德明，反以其謀告怡，怡，慰諭留之，俄而，俊文·允深等至曰，公疾革，宜速往候，怡，卽捕二人，并松節，分配遠島，道殺俊文，忠獻死，怡，以其所畜金銀珍玩，獻王，明年，又以忠獻占奪公私田民，各還其主，且多拔寒士，以收人望，初，忠獻授人爵，視賂多少，時，求八品者甚衆，而官制少，於是，陞五部錄事，爲八品，又以史官翰林之祿，過於五部錄事，亦陞爲八品，怡以爲，先王，增史翰之祿，所以崇儒，祿已增矣，何必改官制，遂復以史翰·五部錄事，並爲權務官，流其弟珣，珣婦翁壽春侯沆·沆子司空琮·承宣申宣胄及忠獻家臣崔思謙·婢桐花·成春·獅子等于諸島，尋召還沆及琮，量移珣于洪州，珣，勇而猜暴，自流洪州，心常快快，大營室宇，多行不義，侵擾居民，闔境苦之，怡及州官，禁之不聽，後，珣聚群不逞，作亂，召其州副使柳文柅·判官吏全兩才·法曹李宗等，兩才，病不就，文柅·宗至，珣卽面縛，懸於樹，尋殺之，又率其衆，至兩才所，引出斬之，登客舍門樓，擊鉦鼓呼噪，州人皆會，震慄失措，珣，以書，召在貶前將軍柳松節于南海·金壽迎于禮山，又召朴文梓，傳檄旁近州郡，令發并爲援，使家僮，發倉粟給軍，有一卒，殺其僮，於是，州中恟恟，國家聞變，遣兵馬使蔡松年·知兵馬事王猷·副使金穀烈，率十領兵，討之，珣，與數十人，逃上北山，州人，引兵圍之，珣曰，吾兄累年不召，又不請州官護待，州官蔑視，不聽吾言，以故蓄憤，嘗詣神祠，三擲杯琖，得吉卜，乃聽左右言，輕躁作亂，雖悔何及，日沒，珣從者，皆亡去，珣，不知所之，墜巖崖，匿石窟，追兵至，自剄佯死，兵執而囚之，死獄中，按察使善懿，獲壽迎·文梓，又移文捕松節等，皆殺之，怡，聞而喜，使懿，窮捕餘黨，懿，希怡意，誣以禮山·結城·麗陽·大興等七縣監務，始與珣通謀，及事敗，欲自免，反捕傳檄者，乃拘縣吏鞠之，俱誣服，七縣監務皆死，又洪州人，常往來於珣者，無問輕重，悉誅之，重房，劾懿擅殺壽迎等，流海島，承宣車佃，無才能，唯以令色媚人，嘗附忠獻用事，權傾內外，怡，疾之，流于羅州，後，怡密爲書召還，授樞密院副事御史大夫，厚饋遺，又與所愛名妓玉肌香，以慰籍之，八年，封晉陽侯，怡固辭，尋叅知政事吏兵部尚書判御史臺事，東北面兵馬使報，蒙古使這可等，至都護府城外，怡曰，前來使，尙未暇應接，況後來者乎，宜令兵馬使，慰諭遣還，時人以爲，蒙古之讐，始於此矣，怡，會宰樞其第議，發南道州郡精勇保勝軍，城宜州·和州·鐵關等要害處，以備蒙古，知奏事金仲龜曰，比來州郡，被契丹兵侵掠，民皆流亡，今無警急，遽又徵發，以勞其力，則邦本不固，將若之何，怡，竟不聽，十年，怡，修陞羅城，以家兵爲役徒，出銀瓶三百·米二千餘石，以支其費，又出黃金二百斤，造十三層塔及花瓶，置興王寺，上將軍崔愈恭，嘗與樞密副使吳壽祺·將軍金季鳳·郎將高壽謙等，邀宴重房諸將於其家，謀欲盡殺文臣，以報私怨，事覺，貶壽祺，爲白翎鎮將，尋遣人殺之，愈恭，爲巨濟縣令，季鳳，爲溟州副使，配守謙海島，明年，愈恭，與季鳳及大將軍李克仁，謀殺怡，怡，知之，殺愈恭·克仁·季鳳·散員朴希道·李公允等，流其黨五十餘人于島，又鞠其黨，辭連樞密副使金仲龜·上將軍咸延壽·李茂功·大將軍朴文備，皆流遠島，十二年，百官，詣怡第，上政簿，怡，坐廳事受之，六品以下官，再拜堂下，伏地不敢凝視，怡，自此置政房于私第，選文士屬之，號曰必闕赤，擬百官銓注，書批日以進，王，但下之而已，嘗拜私奴之子安碩貞，爲御史中丞，人皆憤之，至有上疏言者，怡，又以爲，前遊馬將校，乃御前近衛者，遂召集私第，選之，

鞍馬服飾，極其侈美，倍於往日，又奏，本朝文物禮樂，請一遵華制，其自宋來投者，許於臺省政曹，隨材擢用，慶尙道按察使權應經，圖倭形以獻，怡，問其故，曰異國之人容貌奇怪，欲令叅政知之耳，怡，知其媚，笑之，十三年，怡，患瘡，自兩府，至椽史，爭祈禱，設齋作疏，都下爲，之紙貴，諸醫不能理，閣門祇候林靖妻，本醫家女，帖引毒膏，有效，王，特除靖工部郎中，以慰怡意，王，賜怡匡辟踰戴功臣號，十四年，怡，令教定都監，牒禁內六官，各舉登科未官有才行者，初，忠獻，置教定都監，掌庶事，怡因之，怡門客，多當代名儒，分爲三番，遞宿書房，森溪縣人崔山甫，曉陰陽術數，剃髮爲僧，住金剛寺，與姪倉正光孝等，奪掠爲事，光孝，盜宰人牛，縣官捕之，光孝逃，山甫，亦變姓名，曰周演之，後，至京，以占術惑人，怡，與語稱賞，日益親信，事皆咨之，聲勢日盛，能禍福，人人皆畏之，爭賂遺，遂致巨富，以術僧道一，爲弟子，與相密謀，自言察聲觀色，能辨人貧富壽夭，多引婦人之美者，淫焉，醜聲流聞，畏威，莫有言者，一日，演之，密白怡，今王有失位相，公有王侯相，命之所在，其可避乎，怡，以語腹心將軍金希碑，希碑問演之曰，果有此說乎，演之愕然，詣怡謂曰，前日密語洩，恐禍及，怡，謂演之侮己，會有人，譖怡曰，頃者，公有疾，上將軍盧之正·大將軍琴輝·金希碑，會演之家，謀欲害公，奉熙宗復位，怡，信之，流演之于南海，之正及輝，亦配諸州，籍演之家，得熙宗與演之書，有誓同生死，父事之語，怡，卽遣將軍曹時著等，遷熙宗于江華，又遷于喬桐，沈演之于海，夷其族，捕道一鞠之，乃服，又捕之正·輝·希碑及中郎將牙允偉·別將申作楨，並沈于海，妻子兄弟，分配遠地，又沈希碑子三人，有文大淳者，嘗流紫燕島，有僧犯罪，亦配是島，與大淳相惡，密遣人，譖怡曰，大淳等，潛謀作亂，發近邑兵，將赴京，怡，遣郎將李蕢，執大淳等五人，不問而殺之，朝野稱冤，南京人仁傑，勇悍過人，屬神騎，爲賊魁，剽掠南北，一日入京，邏卒，覺之告怡，怡，遣十餘騎捕之，仁傑徐行，無懼容，騎，不知爲仁傑，問賊安在，仁傑給曰，在某處飲酒，可速往捕，騎，馳去，仁傑，白馬後騰上，猝曳下，奪其馬以走，餘騎，追不及，仁傑，匿利川，發卒捕殺之，仁傑，臨刑曰，吾平生，多行不義，受誅何悔，但六軍在前，出入敵陣，斬將奪旗，吾志也，不得一試，死於人手，爲可恨耳，十五年，加鼈戴鎮國功臣，懷音鎮別將，告西都有謀反者，兵馬使，移牒西都，索之不得，押送告者于京，怡，欲因以收北人之心，賞告者良馬·錦衣·金帶·綾羅·絹五十匹·紬紵布各十四·米三十石，令驛輸其家，又請王褒異，賜廐馬一匹·綾羅絹四十四·紬百匹·布二百匹，又以私田七百餘結，屬諸衛散員及校尉房，以市恩，及第朴寅，聘日本，賣和親牒還，怡，給銀瓶五事·段子六十四·布五百匹·米豆并五十石·鞍馬·琴，以賞之，有僧，將營慈惠院，伐材于江陰縣，監務朴奉時，禁之沒其材，僧，托大將軍大成，胎書以請，奉時不從，集成，請怡移教定所牒，又不從，集成，慚忿訴怡，乃流奉時于遠地，臨陂縣令田承雨，疾上將軍金鉉甫，廣植田園，悉收其租入官，又以其田與民，鉉甫，托按察使崔宗裕，徵還其租，承雨忿恚，償以官銀器，報法司，法司，劾鉉甫·宗裕，怡，奪其狀止之，國學博士金挺立·白良弼，惡學錄廉守臧·直學景瑜，譖以譏謗時政，怡怒，囚衝衢獄，尋配守臧于神草島，瑜于巨濟，十六年，怡，占奪鄰舍百餘區，築毬場，東西數百步，平坦如碁局，每擊毬，必使里人，灌水沍塵，後又懷人家廣之，前後占奪，無慮數百家，口聚都房馬別抄，令擊毬，或弄槊騎射，怡，邀宴宰樞者老，臨毬庭觀之，或至五六日，能者，立加爵賞，於是，都房別抄，鞍馬·衣服·弓矢，效韃靼風俗，競以美麗相誇，都下子弟，亦爭事豪侈，妻，多以貧見棄，且分五軍習戰，人馬多顛仆死傷者，於其終，習田獵，絲絡循環，怡，悅之，饗以酒食，毬庭，舊有樓三間，怡，又增三間，日晚起役，至詰朝畢，怡奏，今年大旱，禾稼不登，請遣使五道，審檢損實，從之，初，國家，授宋商人布，令買水牛角來，至是，宋商買綵段以來，國家，責違約，宋商曰，我

國，聞汝國求水牛角造弓，勅禁買賣，是以不得買來，怡，囚都綱等妻，取所買綵段，剪裁還與之，後，宋商，獻水牛四頭，怡，給人蓼五十斤·布三百匹，怡，私造御輦以進，輦飾金銀錦繡，覆以五色氈，窮極侈麗，王，嘆賞不已，賜監造大集成鞍馬·衣服·紅鞋，王，以輦駕水牛，道路爭觀，十七年，大倉·八廩·地庫皆災，怡及若先，皆擁家兵自衛，無一人往救者，火徹夜不滅，十八年，怡妻鄭氏死，王，命官庀葬事，用順德王后例，賻以大府綵段七十匹，怡辭不受，唯受大小斂所用二十四匹，三殿及諸王·宰樞·承宣以下，爭設奠，務為侈美，市價踴貴，及葬，贈卞韓國大夫人·謚敬惠，百官諸領府，皆會葬，至以金銀錦繡，飾龕室，左右，列紅燭，連亘數里，石室極奇巧，是年，蒙古，大舉入侵，王，遣三軍禦之，馬山草賊魁，自降，詣怡曰，請以精兵五千助擊，怡，大喜賞賜甚厚，造戎冠金環子，許着慰之，怡，又遣人，往廣州冠岳山草賊屯所，誘致賊魁五人·精銳五十人，厚賞以充右軍，忠州奴軍賊魁令史池密守，僧牛本來，怡，褒賞，以密守，補校尉，牛本，為忠州大院寺主，加三重，蒙古兵，至禮成江，京都洵懼，怡，與若先，以家兵自衛，守城者，皆老弱，怡，遣御史閔曦，內侍郎中宋國瞻，犒慰蒙古兵，昇天府副使尹緝·錄事朴文樞，潛置家屬于江華，乃說怡曰，江華，可以避亂，怡，信之，使人往審之，中道，為蒙古兵所拘，明年，蒙古河西元帥，遣使寄書，送金線二匹，其書，稱令公，蓋指怡也，怡，不受曰，我非令公，以歸淮安公佺，佺，亦不受，往復久之，怡，竟使學士李奎報，製佺答書以還，怡，使江華勸農別監申之甫，迎熙宗於紫燕島，王后薨，怡，獻棺槨，皆飾金銀，王，見而嘆賞，怡，聞大集成女，新寡而艷，娶以為後室，時，集成，為後軍陣主，雖敗軍，恃怡無恐，大氏，欲歸謁父母，怡，令軍器別監李資敬，索十品銀瓶二十，資敬，奪五店公私瓶，以充之，怡，欲遷都江華，會宰樞其第識之，皆畏縮不敢言，夜別抄指揮金世冲，排門入詰曰，松京，自太祖以來，歷代持守，凡二百餘年，城堅而兵食足，固當戮力，死守社稷，捨此將安都乎，怡，問守城策，世冲，不能對，集成，謂怡曰，世冲，效兒女之言，欲沮大議，請斬之，以示中外，金鉉甫，希集成意，亦言之，遂引世冲斬之，怡，遂請王亟下殿，幸江華，王，猶豫未決，怡，奪祿轉車百餘兩，輸家財于江華，令有司，刻日發遣五部人戶，勝曰，不及期登途者，以軍法論，又遣使諸道，徙民山城海島，發二領軍，營宮闕于江華，遂遷都，時，霖雨彌旬，泥濘沒脛，人馬僵仆，達官及良家婦女，至有跣足負戴，鰥寡孤獨，失所號哭者，不可勝計，二十一年，王，論怡遷都功，欲封侯立府，百官，皆賀于第，怡，辭以迎詔禮者不備，於是，州郡爭致饋遺，遂封為晉陽侯，怡，營私第，役都房及四領軍，輸舊京材木，又多取松栢植園中，悉以船輸，人多溺死者，其園林，延袤數十里，怡，於西山，發民私藏冰，民甚厭苦，又安養山，去江華數日程，怡，使門客將軍朴承賁等，取其栢樹植之，時方沍寒，役徒，有凍死者，沿路郡縣，棄家登山以避之，有人，勝昇平門云，人與栢孰重，又為崔宗俊，構第，二日而成，奪路人馬，輸材瓦，時，托怡而輸私物者，亦如之，行路嗟怨，二十二年，怡，與宰樞議，徵州郡一品軍，加築江華沿江堤岸，二十九年，加食邑，進爵為公，三十年，校尉趙甫壽，譖其表兄大將軍宋白恭於怡，怡，投白恭於江，拜甫壽為郎將，左倉，納晉陽稅，王，以晉陽，已為怡食邑，命黜倉別監王仲宣，有司，又請論仲宣及倉官，怡，奏曰，臣重違上命，雖已受封，今年稅，請依舊納倉，赦仲宣等罪，王，從之，怡，修國學，納米三百斛于養賢庫，又遣大司成宋國瞻·諫議洪鈞，相安南地，欲鑿渠通海，不可乃止，東海中，有島，名蔚陵，地膏沃，多珍木海錯，以水程遠，絕往來者久，怡，遣人視之，有屋基破礎宛然，於是，移東郡民，實之，後以風濤險惡，人多溺死，罷其居民，三十一年，怡，以郎將申着，為按察使，正言李儼，上書劾之，怡怒，貶儼延州副使，督令之任，大卿任景純子峒，善書，怡，愛之，養以為子，改姓崔，授將軍，峒，性貪鄙，恃勢恣橫，怡，嘗以私織全幅黃綾，粧康安殿後

壁障子，令垣寫無逸篇，王，見而嘉之，賞賜甚多，三十二年四月八日，怡，燃燈，結彩棚，陳伎樂百戲，徹夜爲樂，都人士女，觀者如堵，五月，宴宗室司空以上及宰樞，結綵棚爲山，張繡幕羅幃，中結鞦韆，飾以文綉綵花，設大盆四，盛冰峯，盆皆銀釘貝鈿，大尊四，插花十餘品，眩奪人目，陳伎樂百戲，八坊廂工人，一千三百五十餘，人皆盛飾，入庭奏樂，絃歌鼓吹，轟震天地，怡，給八坊廂白金各三斤，又給伶官・兩部伎女・才人金帛，其費鉅萬，三十三年，怡，享王，設六案，陳七寶器，膳饌極豐侈，怡，自誇詡曰，復有如今日者乎，怡，好燕樂，聚飲無度，或宴三品以上于其第，或宴宰樞及文武四品以上，歌吹連日，或至夜分而罷，嘗會宰樞及諸將軍等四十六人宴，酒酣，御史中丞將軍林宰，執卮作倡優舞，見者鄙之，又燕兩府及諸將軍，極歡，使伶人，奏唐樂，天忽雷電，怡，懼止之，三十六年，死，輟朝三日，諡匡烈，及葬，儀衛甚盛，後配享康宗廟庭，怡，無適子，嬖妓瑞蓮房，生二男萬宗・萬全，初，怡，欲傳兵柄若先，恐二男爲亂，皆送松廣社剃髮，並授禪師，萬宗，住斷俗，萬全，住雙峯，皆聚無賴僧，爲門徒，惟以殖貨爲事，金帛鉅萬計，慶尙道所畜米五十餘萬石，貨與取息，秋稼始熟，催徵甚酷，民無餘粟，租稅屢闕，門徒，分據名寺，倚勢橫行，鞍馬服飾，皆效鞦韆，相稱爲官人，或強淫人妻，或擅乘驛騎，陵轅州縣官吏，其他僧徒，乘肥衣輕者，詐稱弟子，所至侵擾，州縣畏縮，莫敢誰何，刑部尙書朴暄，言於怡曰，今北兵，連年入寇，民心疑貳，撫以恩信，猶恐生變，今兩禪師門徒，割剝產民，歛怨實多，南方騷擾，若北兵猝至，恐相應爲變矣，怡，聞之猶豫，會，慶尙道巡問使宋國瞻，亦寄書言之，怡，謂暄曰，若之何，暄曰，公若召還兩禪師，令巡問按察使，囚其無賴僧徒，以慰民心，可無變矣，怡，然之，卽遣御史吳贊・行首周永珪于雙峯斷俗，發錢穀，悉還其主，焚契券，囚門徒之爲惡者，中外相慶，萬宗・萬全詣京，與其妹宋情妻，泣訴怡曰，尊公在時，侵逼尙爾，百歲之後，吾兄弟，不知死所矣，怡，乃悔之，反謂暄離間父子，流黑山島，貶國瞻東京副留守，悉釋其門徒，令萬全歸俗，改名沆。

(9) (史料3)

沆

沆，初拜左右衛上護軍戶部尙書，諸王宰樞，皆詣門賀，怡，使待制任翊授書，侍郎權趨習禮，遷樞密院知奏事，怡，分與家兵五百餘人，及怡病，沆，領兵入府，聞病殆，卽還其家，怡死，知吏部事上將軍周肅，領夜別抄及內外都房，欲復政于王，猶豫未決，殿前李公柱・崔良伯・金俊等七十餘人，歸于沆，肅亦附焉，合番擁衛，沆，服喪二日而除，及葬，杜門不出，蒸其父諸妾，王，拜沆銀青光祿大夫樞密院副使・吏兵部尙書御史大夫太子賓客，尋兼東西北面兵馬使，又以爲教定別監，沆，忌知樞密閔曦・樞密副使金慶孫，得衆心，流海島，又流左承宣崔峒・將軍金安・指諭鄭洪裕及怡侍妾三十人，王，下制曰，自皇考御宇，寡人卽祚以來，晉陽公怡，左右輔弼，故三韓如仰父母，今忽棄世，無所倚賴，子樞密院副使沆，繼世鎮定，可超授相位，明年，王，贈沆母靜安宅主，沆，黜巫覡于城外，又以教定別監牒，鑄清州雪縣・安東蠶絲・京山黃麻布・海陽白紵布諸別貢，及金・洪州等處魚梁船稅，又徵還諸道教定收獲員，委其任於按察使，以收人望，初，怡，以羅得璜・河公敘・李瓊・崔甫侯，爲宣旨使用別監，分遣諸道，爭剝割誅求，民不堪苦，沆，欲干譽，皆罷之，不數年，復用，人皆憤嘆，王，下制，以怡食邑晉州祿轉稅布徭貢，直納沆家，沆，辭不受，一日，沆，衷甲領兵，自長峯宅馳馬，移于見子山晉陽府，由東偏戶入，蓋畏人也，沆，前娶大卿崔暉女，以有疾棄之，改娶左承宣趙季珣女，王，命牽龍・中禁都知・巡檢白甲・內侍・茶房衛送，賜御座肩輿燈燭，又賜黃金鏡奩粧具，諸王宰樞，皆贈金帛致賀，王，命移忠獻眞于昌福寺，怡眞子禪源社，叅上・叅外別監及文武官，各二十員導從，如移太祖眞儀，沆，爲僧時，與甫州副使趙廉石・道康

監務朴長源有憾，及用事，乃流于島，侍御史李儼，素與二人善，及按慶尚道，至固城，召二人宴，縣令權信由，亦與焉，後有僧，譜信由於沆曰，儼與信由，譜召廉右等謀亂，沆，投儼等四人于江，時人哀之，王，以築中城功，拜門下侍中，封晉陽侯·開府，讓不受，一日，月犯房上相，司天臺奏，月犯上相，占云，主有憂，上相誅，有亂臣，臣代其主，時，王，將迎蒙古使，幸梯浦宮，故司天，欲王修省停幸，沆，見實封惡之，嗾御史臺，劾司天妄奏星變，罷判臺事崔允旦·太史丞吳安矩，沆，嘗以繼母大氏，助若先子救，不右己，深怨之，乃奪大氏宅主爵，收其財產，令夜別抄皇甫俊昌等，投大氏前夫子將軍吳承績于海，會，夜黑潮退，承績得不死，祝髮，潛入皆骨山，寄書于母，家奴，至密城，洩於人，副使李舒，聞之以報沆，沆，大怒，護承績，投之江，斬俊昌等六人，流大氏于海島，尋毒殺之，大氏族黨及諸奴婢，或殺或流，凡七十餘人，舒，以功超拜軍器監，沆，信譜，凡有私憾者，輒誣告謀亂，以邀賞，及鞫無驗，沆，又遣將軍宋吉儒，沈金慶孫于海，以承績姻親也，分遣人，沈殺南道編配者過半，周肅，初名永寶，性浮夸，為怡友婿，怡，寄以腹心，每聞讒訴，必委肅治之，肅，阿其意，無問曲直，皆殺之，又使肅，監選校尉，視賄賂多少為次，朝野切齒，怡死，沆，以肅先附己，待甚厚，事皆咨問，沆嘗從兒子山第，不令肅知之，始相疑忌，沆，遣郎將林庚，押肅流島，至熊川，沈殺之，肅，意將軍金孝精構之，臨死語庚曰，孝精與吾，謀欲復政于王，庚，還以告沆，沆，流孝精于島，尋殺之，又流肅女婿將軍崔宗弼·羅州副使李昫，是年，王，命封侯立府，沆，又讓不受，三十九年，李峴，奉使如蒙古，沆，謂峴曰，彼若問出陸，宜答以今年六月乃出，峴，未至，蒙古東京官人阿母侃·通事洪福源等，請發兵伐之，帝已許之，及峴至，帝問爾國出陸否，對如沆言，帝又問，留爾等，別遣使審示，否則如何，對曰，臣正月就道，已於昇天府白馬山，營宮室城郭，臣敢妄對，帝乃留峴，遂遣多可·阿土等，密勅曰，汝到彼國，王，迎于陸，則雖百姓未出，猶可也，不然，則速回，待汝來，當發兵致討，峴書狀張鎰，隨多可來，密知之，具白王，王，以問沆，對曰，大駕不宜輕出江外，公卿，皆希沆意，執不可，王從之，遣新安公佺，出江迎多可等，請入梯浦館，王乃出見，宴未罷，多可等，怒王不從帝命，還昇天館，識者曰，沆以淺智，誤國大事，蒙古必至矣，未幾果至，屠滅州郡，所過，皆為煨燼，四十年，拜門下侍中判吏部御史臺事，沆，在家遙謝，下制曰，朕，臨莅三韓，四十有一載，自丙子辛卯以來，鄰敵侵擾，禍亂相仍，專賴晉陽公崔怡，輸誠衛社，轉籌制變，至於躬奉乘輿，涉水遷都，功業所致，社稷安寧，萬世子孫，帶礪難忘，嗣子，門下侍女中崔沆，承襲家業，應時而起，尊主庇民，一新令條，佐致中興，功勤莫大，宜垂異恩，覃及內外，其赦斬絞以下，加怡爵號，沆，封侯立府，先妣，加封爵，沆，瓶九曜堂于關西，及成，王，幸觀之，許沆親侍二十人，初入仕，丘史二十人·眞拜把領二十人，初入仕，監督官上將軍朴成梓子一人，眞拜把領，工匠，賞功有差，自遷都後，蒙古，督令出陸，縱兵侵掠，永寧公綽，在蒙古軍，胎書沆曰，去年秋，皇帝，怒大駕不渡江迎使，發兵問罪，吾無計沮之，白皇帝曰，臣願將帝命，諭本國，令復都舊京，子孫萬世，永脩蕃職，皇帝勅臣曰，汝與本國宰臣，歸到汝國，諭以朕命，使之出陸，吾於六月初吉，到也窟大王處，具告之，勒令隨軍，一時同發，今也窟等十七大王太子，各領兵馬，抄蒙古·漢兒·女兒·高麗人，屯田南北界，以蒙古精兵，分攻水內山城，且帝命大官人曰，國王，若出迎，即當退兵，今國之安危，在此一舉，若不出迎，湏令太子若安慶公，出迎，必退兵，社稷延基，萬民按堵，公亦長享富貴，此上策也，如此而兵若不退，族予一門，願除狐疑善圖，不失今時，後無悔恨，峴，亦隨蒙古軍而來，胎書云，吾二年見留，觀其行事，殊異前聞，不嗜殺人，愛惜物命，去今年賜詔條件，固非難事，何不出迎，皇帝怒曰，爾國，不知朕愛護之意，故發兵問罪，國家，如欲延其基業，何惜遣一二人出降，今東宮若安慶公，出迎陳乞，庶可退

兵，願公善圖，翼日，幸樞會議，皆曰出迎便，沆曰，春秋，貢奉不絕，前遣三次使价，三百人未還而猶若是，今雖出迎，恐爲無益，萬一執東宮若安慶公，至城下邀降，何以處之，皆曰，侍中議是，出迎議寢，四十一年，宴幸樞于其第，觀擊毬戲，馬別抄，有以黃金飾障泥・金葉羅花，插馬首尾者，沆，嘗分日，宴諸王・幸樞・承宣・文武四品以上，自是，宴會無常，明年，王，詔曰，且・爽相周，蕭・曹佐漢，君臣相資，古今一揆，晉陽公崔怡，當聖孝登極之日，寡人卽祚以來，推誠衛社，同德佐理，越辛卯，邊將失守，蒙兵闖入，神謀獨決，截斷群議，躬奉乘輿，卜地遷都，不數年間，宮闕官廡，悉皆營構，憲章復振，再造三韓，且歷代所傳鎮兵大藏經板，盡爲狄兵所焚，國家多故，未暇重新，別立都監，傾納私財，彫板幾半，福利邦家，功業難忘，嗣子侍中沆，遁世家業，匡君制難，大藏經板，施材督役，告成慶讚，中外受福，水路要害，備設兵船，又於江外，營建宮闕，且築江都中城，金湯益固，萬世永賴，況今大廟，草創未備，實乖奉先之意，朕心未安，又令門客朴成梓，爲督役使，凡百之費，皆出私儲，不日功畢，制度得宜，誠罕世大功，朕甚嘉嘆，其令有司，開府益封食邑，加贈考妣，進秩二子，成梓以下，至工匠，亦皆賞賜有差，沆，辭不受，尋進中書令監修國史，新及第郭王府等，謁沆，沆，登樓，與花酒，四十三年，賜濟衆康民功臣號，前西海道蘇復別監宋克儂，斂其實資三百八斛，賂沆，卽拜御史，人號爲其實御史，前學錄鄭城，譜於沆曰，河東監務盧成，與鄉人李珪・李昌，結爲兄弟，招集陝州副使薛仁儉・南海縣令鄭阜・及弟翁汝詣・僧明就等，常置酒爲樂，誹謗國政，當宴會，書天子之門，諸賓莫入八字，帖諸門，以防外客，各陳懷唱和，有賢士槌曾日・倡難得意秋之句，沆怒，斬成・珪・昌于市，配仁儉・阜等于海島，時人，指城爲食人者，四十四年，沆，病篤，王，爲放獄囚，沆，扶病，登後園小亭，賦詩云，桃花香裏幾千家・錦幄氤氳十里斜，無賴狂風吹好事・亂驅紅雨過長河，吟畢，還寢暴死，追贈晉平公。

(10) (史料 4)

誼

沆，初爲僧，通宋惛婢，生誼，適妻無子，以誼爲嗣，誼，美容貌，兩手，微有金色，性沉默，多羞澁，沆，使景琳師，芮起教詩筆，權題・任翊教政事，鄭世臣教禮，王，以誼，爲殿中內給事，賜紅鞵，沆，嘗以誼，屬宣仁烈・柳能曰，若輔導成就，獲承家業，則君等之賜也，及沆病，召仁烈・能，執手曰，君等，保護此子，吾死無恨矣，沆死，殿前崔良白，祕不發喪，按劍，叱侍婢勿哭，與仁烈謀，以沆言，傳于門客大將軍崔暎・蔡楨及能等，會夜別抄・神義軍・書房三番・都房三十六番，擁衛乃發喪，王，卽授誼借將軍，又命爲教定別監，百官，皆詣門弔賀，沆嬖妾心鏡，美麗慧黠，誼，曾私之，沆死之日，納之後房，沆，本妓出，誼，又母賤，故時人，讀簿書，至倡妓賤隸之言，輒諱之，人有仇怨，卽譜以訾公所出微賤，誼，盡殺之，誼，發倉，賑飢民，又給諸領府各三十斛，王，以誼，爲樞密院副使判吏兵部御史臺事，讓不受，誼，復歸延安宅及靖平宮于王府，納其家米二千五百七十餘石于內莊宅，布帛油蜜于大府寺，又以年饑，發私廩，賑權務隊正近仗右衛神虎衛校尉以下，及坊里人，尋拜樞密院副使，又辭不受，改授右副承宣，有閔偁者，自蒙逃還，以所佩金牌獻誼，且曰，在蒙古時，聞大臣密議，今後不復東伐，誼悅，與第舍米穀衣服，拜爲散員，四十五年，誼，以將軍邊巖・郎將安洪敏・散員鄭漢珪，爲江華收獲使，恣其攘奪，百姓嗷嗷，舊制，奴婢雖有大功，賞以錢帛，不授官爵，沆，始除其奴李公柱・崔良伯・金仁俊，爲別將，聶長守爲校尉，金承俊爲隊正，奴等，白誼曰，公柱，身事三世，年老有功，請加叅職，乃授郎將，奴隸拜參，自此始，誼，年少暗劣，不禮遇賢士，所與親信者，如柳能・良伯之輩，皆庸隸輕躁，其舅巨成・元拔及心鏡，內行譖訴，外施咸福，黷貨無厭，時又遭歲飢饉，不發粟賑貸，由是，大失

人望，及吉儒之貶，又與柳璥·柳能·金仁俊兄弟等，交惡不相接見，神義軍都領郎將朴希實·指諭郎將李延紹，密謂璥·仁俊·承俊·公柱·將軍朴松庇·都領郎將林衍·隊正朴天湜·別將同正車松祐·郎將金洪就·仁俊子大材·用材·弋材等曰，誼，親近儉小，信讒多忌，不早爲之所，吾曹，恐亦不免，遂定計，約以四月八日，因觀燈舉事，中郎將李柱聞之，與牽龍行首崔文本·散信庾泰·校尉朴誼·隊正俞甫等，密爲書通誼，良伯，大材之妻父也，大材，以希實等謀，告良伯，良伯佯應，以告誼，誼，急召柳能計議，時，日已暮，能曰，暮夜無能爲，請以書，諭夜別抄指諭韓宗軌，遲明，召李日休等，勒兵討仁俊，未晚也，誼，然之，大材妻，在側聞之，以告大材，大材，告仁俊曰，事急矣，不如早圖，既昏，仁俊，率子弟，趨神義軍，見希實·延紹云，事洩，不可猶豫，乃召集向所與謀者，及別將白永貞·隊正徐挺·李梯·林衍，使衍及指諭趙文柱·吳壽山，捕宗軌殺之，又召指諭徐均漢等，會三別抄于射廳，使人呼於道曰，令公死矣，聞者皆集，璥，與松庇等亦至，仁俊曰，如此大事，不可無主者，可推大臣有威望者，以領衆，即召樞密使崔昱，昱至，又邀朴成梓議之，仁俊，召良伯，未及升堂，別抄兵，以炬燒口，遂斬之，衍，又斬日休于其家，仁俊，令誼門卒不報更籌，分隊伍於廣場，燃松明如晝，衆人呼噪，適大霧，誼家兵，無一人知者，黎明，夜別抄等，壞誼家壁而入，元拔，壯士也，聞難驚起，拔劍當戶，兵不得前，元拔，自度不勝，欲擔誼走避，以誼肥重未能，乃扶上屋葺，又自當戶，壽山突入，擊元拔中額，踰垣走，別抄，追斬于江岸，又索誼及能，皆殺之，璥·仁俊·昱，詣闕，百官俱會泰定門外，兩府及璥·仁俊入謁便殿，復政于王，發誼倉穀，分賜有差，太子府二千斛·諸王宰樞文武百官，以至胥吏·軍卒·自隸·坊里人，小不下三斛，又賜諸王宰樞，至權務隊正，布帛有差，又以所畜馬，賜文武四品以上，又加賜三品，遣郎將朴承蓋于慶尚道，內侍全琮于全羅道，籍沒誼及萬宗奴婢·田莊·銀帛·米穀，宰樞奏，崔忠獻，罪盈惡積，崔怡，專權擅命，宜削去圖形，罷廟庭配享，從之。

- (11) 黃秉晟著『高麗武人政權期研究』図書出版新書苑，第3·4章參照。1998年。
南仁國著『高麗中期政治勢力研究』図書出版新書苑，第5章參照。1999年。